# 言塵抄　上

7
内閣文庫
和書
類
號　四三三四〇
冊　二
函　二〇二
架　一

和歌

内閣文庫
番號　和　43340
冊數　2（1）
函號　202　7

202-7

国立公文書館
National Archives of Japan

然ル所中興の時代[illegible]
有

林氏藏書
日本政府圖書
淺草文庫
昌平坂學問所

和歌を詠する事古乃先達様〻に申へしたと
もの也しより四病八病九品十体なとゝて左右
く論の外人のさとり知る事かたきこと有へし大かた
病を犯さゝる事有かたし唯中古已加て
基俊と頼俊俊成の為りし二人定家家隆
寂蓮等は風体か本さるやうなれとあらま
しの和乃在実にゆへまて俊成卿に云爾
とよりのみつ定ての我ら其ぬるを
もと言ふ云かなと云る事とまし定家
てゝ和歌を作る心為作と作られまし

たまい大まかりやまとくにえられたる紙毎人
のんきへにそまり吉くりとちかまを悉は横
ま存少人はなすや此道は神代ゟさた
しまりまて我国の風とあまます人とは
ふ去んなく云なさゝハあるへすしられた
うれおりもすなはち口にいふ人ぞかゝる長しやい
翁とヘあらさむやと出をて小袖也来
てや次はいはそかゝやうと云お道是則之
致風なり此のあるふくやと云出し読るや
を壽や法らうれは下らには哥みてゝおは

それは詞を出はくいひつゝねなる卅一字に
定句は五七五七ゝにさるやもなすなはち八雲
しな出雲八重うきの哥よりあまりて此文字数
く大里にてよしとていはゆるまなを論り
さまゝに此姿流と云ありけるのなりけり
かさねすと云おもてをなほともつらねるを万葉
此まはるより曲体を詠ゝてこれはかきりと
志らぬや古今まてハ人丸のこすをかなくと
ありし此滿とおなしことし雖ありし此
こゝの五文字あるべくは情ニある歌ぞの

満こそて積へよなはれしとあそひゝるると
りよせされ花のうつりたるも此時代よ
を猶かうすあまりはましまするまを
又其後人の言ハ多く出しると只具するを
のそこそは古今のころより延喜ハ序代有
やうに詠しゝるたとへりし難波津
こそはしりけれの早らへを思ひおこして
淺香山かけさへ見ゆる山の井乃あさくこゝ
其のおもふ花題目をといてまんと接よ
ようミ候ハあしるもされこそ此時代よを
かさりしあれもあまりはまゝあるすまじきも交てよ
也後撰拾遺まてをハ此也凡代々集ハ
古人のよミをきたる言をえらひへて
末乃古詠を而しハ常又当代の風躰も
交ハるや八代集以来其代々の風躰らか
つかたまたりよく見識てて存とも為秀
にいなをしく語ひし

一堀川院百首作者の风体まさに又一すかたハ
ありしかれともやさしくて心ゆかれさり

一詞花集ハ撰者をとる所上手と覚しくす
くれ侍つれとあまりに一体なりけり
たゝしも言まてあふなきや後代の難を
かゝしありとかや

一金葉集又撰者名誉不及とされとを
是もしきすあるまゝよろし

一後拾遺集ハ撰者ゆゑ世の不用侍るか
同時に撰しれける仙経信卿なとそし

なるまてはよきうまゝけりかねに難後拾遺と云
抄物出来てうしろてかりけるとやこれ難
後拾遺ハ経信卿作とかや申

一千載集ハ俊成卿撰也此卿ハ言ハ人に
すくれ給のに侍も基俊と俊頼とを和歌
みけまゝ花実をつれたる集とアリ
定家卿の云和歌の道中古よりかくて
侍りしを西行上人と云ひとおほ来て此道を
興たるとく作りましたる悪しき言のとも
せんなよくよろしくあらまほしきものつゝ

納得の歌有つしとやこの心よわおもて身
つらさと重と師説や、
一 新古今集ハ後鳥院の勅にて五人之を撰
しとも大すぐハ勅のたりしまゝの千り
けりとや実まれに花ハ多しると云 後代
の難有りなるとぞや是則三十六人の作
者の歌を万葉のころの歌を金玉等
まと人の撰集さへ見けれハよき歌す
くなきまゝにて古人の歌共ほろび亡
世の風躰のことなるゆへよろりますかる
れすなかり言教なるへし
一 新勅撰集ハ定家卿一人承て之を撰れて
花実をかねたる集と云ゝ是よりて
この大すぐハ心ゆつたきてすなる
一 続後撰ハ為家卿撰也 又新勅撰の風
躰と云ゝ言をいほの集ハ皆撰者しつらへ門
私曲交てひさすて一部ニおよむまじき物と
なりすへて和哥ハ代ゝ多く十部を皆
うかゝひ定かく道を得て学せましとや
毎人家之ある節用不知理よしと有て

風躰の故かくまよひかくつきされとも見るへし
とし死以外人をもていひおこすや為相の
風躰しへとて為秀の給しにも十躰の中
まいつまてをも不出先我心のあかひえつ
へき躰をよしと存してもしたて十躰を
皆うかゝひ習へは心のつけを出来よ道
てかとをもかなはすしも歌よいつまての一躰
を上手と定し執むねなしぬよき歌は
いつまての躰にてをよくありしあき歌はいつまて
此躰にてをもよろしとやさまは為世の此躰は
やさしくすゝやかにたゝ詠すとそしへ躰な
為兼のはたゝ言とくいひたくさんまかさます
見ても此ありさ悠思えしる此時月なと大かた
うきと云出来へしとゝは為相の風躰をと
る世の此詞付なうてかゝりも執は歌は此
けなく餘情のなきまさるをとりくまれ
一向にすてすらいとも人さるゝ此歌なしとそ
おもく侍らまし能出し歌の名此たゝとこ云
物躰為道のつらんのをとましく執事ま
為相の此歌を両は秋花躰ますあり極上人

生たるやうなるさまにて小磨移しける さ西やとのたとへ事より是則ならは 風雅面白様なるはいふ所まで代の詩も 才一ヶ同類をまねられたくや下さゝとりとも 詞をりまとられまよりてんの鉤をとゞこらへく る事上古のごとくは及れまじおぼえんずる 詩はたとひをろしくとも一首も我詠は ありがたかりぬへし式すれど新古今此 の上手生さとりぬべく面々人を風雅 いろいろの限をあらくりと存ぜん緒多く云也 されは當世の詞才を為兼の詞才も為相の 詞才をよく讃出しけるよりありしとかよりを たゝふるまひとしてやしもなれくは 詩のよりありしとさしをまで唯詩を のこおさむくはひとつこと、なやいつさ為ゆるを まつ世の詩よりは上古の詞人よりを大く るへくこそ甚なる上古と思ひと思ひを いかん云ひるあるしるまじはされひの かりもなしとは松をひと思つりとて云ての新 ことあるへうて皆以古事同類すへし

さまいふを如しよなか詠哥にかはれや
一大方和哥も連哥もいさゝか数寄の人く
て後こそ和すきの人といふなりまて
の心さうしのあらん人は地哥も地
連哥とするなりと申也是則哥
よりも連歌しや
一やさしすしを哥よりも連哥にも
いされまきは唯すとてん心のすきて習
かる人も尤やこまかとも数多人とて
一生得心を寄せに心を味れ有人あるし
是をとは器用の人と云也其の人は稽古
一首を一句もいはず言まつゝあけよ云其
用捨するふかくと案ずるを一両
をやいそうしんな風情を吟味用捨
すまい一首は中の句の半すてを置白
ぬすきたるて出来や似せものなり
心えていかほとゝさみつくちをもちて有
まし一字残本をとく用捨すゝ論なる
へし哥も連哥もかやうによりなるへ
きおもうらお作すかや うまさを心えてうき

を見る事もある事を引へきにや三句も
連哥をよくさすれは其中に一二句も上手
文句のなき事不知をさとる事なれと上手の
いはく口惜かりける哉或はしらぬ人或は下手
なとは何とそ一句もおもしろくよまんとかまへ
大かたしらぬや世中はひろきなり一句
いふ事かくしをよきの作へきて是非
をきはめんとてつゝしかゝるへきは自取て自
心ありとつへきやたゝしとこては有仁義
しも連哥もたゝ我ならしと思はまよひ

人丸赤人はいまさらに救済周阿はいふに猶
とほとては其身からのこするをのあるへき
ほしくをかはりいてきや此信乃堂本ま
たとひ座功多工夫を積上手なれ
なる所しなや物の上手の先比は皆同趣
月かとかはれ人へとそもし難きをれまかせ
當なるなとを存るを他人は悪を上手の言
此と云や独は他のしたかはすあらすとのま
うたゝ奈ふまて我僻案を一ちかうたしなみえ
非をそとかひていしくそさと見えへき道

從と日明日の損はかゝるいさけまじとぞ
申れどもほかに求は人をもおそれは
思ひ給へつゝしこそすれば道もなき花の宴
のくをもてよそれあしつま先は人の事を
そし當や此真似するとお指てなし

一哥連哥は一向にすさまじかりにく人あり
らひ言はかすかにして許まは文はよまれぬ
ことを安易おそひろく見とをさやたを
いかよ難ゑ思ふ胸の中にとも学
をも古今集ちて云庭とゐつけ事

此代の抛をも人あり三そて見覚ゆ人まや
てまでもそてあそさてすとんえてつ即みけり
云出さんといふくい口惜するやとのつゝ
あり事ここの出来のみつるあつてすしを
さしあゐをにするへ人をたとへし此の連哥
士君子重くゆるしよしとてすこいの
こさて人の道をあまへ我なんとするいか
事すなはち下手のことびや上手は無來
みて国人の口まはひまいるあるかり
七学は當道也や 一家二なる名はある須

心情は哥のまことなるによりてあれとも力に
なすへきや哥の題は昔も今も見知也
哥はそのまゝにすへく連哥の式を学ふ
合を當道あるへし我云出候事西よりも道
心情はことはその物の物とそ云之二條
殿作には連哥者合古下手の用ふ
みし時も知る耳よりてれ當世本
也とよはひさあらしなりけるして
用や下手の用はやまさるゝ古物也
と第一也

---

# 言塵集之一

## 一古歌

年内立春　為家卿

結氷之けにもしる年内にたてる春の谷水

門松　知家卿

大方の年まつはかる民のとの松やたつらむ春まつとて

若菜　為則

年のはや月をかけてこよりもむへつみけし忠くれ（家立）

朔日　後徳大寺左大臣

さこれ袖よるあまつうまつきにたつ居なの面うすきも哉

三位入道左大臣
袖たれて玉しく庭を打拂ひてそ春をむかふる
定家卿
かすましく春の翁の庭の面に立やかれ雪のうへ人
俊成卿
九重や玉敷庭にむらさきの袖をつらぬる千代の初春
光明峯寺
初春の花のあしたに松ひきて民の戸とも千代を見る哉
經家卿
氷（ヒ）様（ためし）
松かさてたえぬ氷室にしまいて千代のためしを今日そ見けり
衣笠内大臣
立かへる年月の春に氷たにうちとけて年ことに賢
叙位
同
四方の海浪も川もおさまれる代をはらめるは今日そ来也
門松
西行
たてかけくたつる宿の松にこそて春のこゝろある常盤木
國栖
衣笠内大臣
吉津川吉野の国栖のいつも住まつる春の初
是ハ皆春乃題也然るに題はいつれと
もたゝ立春と云題にていかやうの事

なとこそ詠し腹赤も国栖も浄御原天皇の
御代の例とや　国栖は人の名也とす
はすへて喜まいあられ何とても百泪れ
節会にまいりする貢調と国栖の口笛
たてまつて彼笛を吹なるとやらん
とはしらといへり一説（口笛とも云也）

元日鏡　　俊頼

言ふままに我をからいのます鏡姿をうつしゝ見る

春たゝは花とも思ひし梅の花めつらしひる人の折つる哉　　貫之

めつらしひまやとなめつらしまでやとこそいへ

元日宴　　家隆卿

諸人の立まふ庭のさかつきにうつるこそ千代の初春

季経卿

立かへる年のみかいろを玉にまてとあらふ千代の翁

慈鎮和尚

百敷や春はむかしにかへるらむ君か千年のけふそはしめ
哥合哥や節会のくたしなる事をと欲
ありま判者云宴の人可そもとわらふ
侍らすとこそ

顕昭

正月立のふたつの岳の百敷の空も明ぬるかすみなるらん

哥合や難云むつきとはむつきと申すなとてなる也

陳云此五文字万葉にみえたりとなと　又

難云其明おほつかなしとなと　又陳云

正月の節会にも其明とへき

の由宜歟すへてかりそ云　判者俊成

判云此五文字万葉有　但万葉は

哥はやさしき詞をとりて用へし云

まとゐをよろしかるへし不審なしと云

---

立春　　慈鎮和尚

芳野山初春風にとけぬらし桜の枝をまちや見るらん

西行

とけそむる初若水のけしきにて春立事のくまれぬるかな

私云哥のよい處本縁の言乃有と云へは

は若水の氷のとくるを春しる何とく

まれぬるに讀しる様乃詞也當末

縁といふも文字くさりのやうなり云

に、あしき事本詞なりあしさら

やたとへは後なりすゑもあけかく、

の月と詠る詞のことしゐはすむまと
ゆふこの月とよみてをんハかすみへき
やされとをじはまむゐりと云つかを
しかれとも妻縁の言ととく定
家の庭訓や

有家

冥の庭ゆり年の相坂の夕つけ鳥の初声
私云哥ハ古来よりと源来しる言と
こそまもり　詠てこれをておほ侍し申
つけ鳥の声の初音と読て可為見

をおほかハよそてへまる詞つまいかは源
氏ふるき是詞の山郭公まかこの道
行人あまいて来まゐる詞を山時鳥そ
子欲いとこしらへしまり人ハ玉かここ
おほすとも具道行人にて歌を見を
しゐまれ花をまつけつまいか
詞かて哥のしけ言るをやや名月の
てりてくて侍るや

知家

岩戸山雨の空るなかとてある雲井にまいまうとり

私云岩戸の宮とい天の戸あり
大輔
真木の戸をあくれば雲やいそぐらん袂にさえ風ゆ也
私云風越てやと云事をつゞしよ詞有り
是をとる詞二字や古二字をとあしてある
さ式れたる事不や
西行
年暮ぬ春くへしと思ひねにまさしくみえてかなふ初夢
私云初夢式二字也詞二字や
俊成卿
鶯のゐるふ池の氷もとけにけりはをさの羽交や春の初風
私云羽かひと云事有ぬるきしと云とて
うるは枝見えや是あれは羽の風まさしくらはしと
西行
三笠山春を音にて知らせけり氷をたゝく鶯の滝
私云鶯の滝名所云云
忠峯
春をすゝ立といふ日なむかへつゝ年あけぬと秋やなるらん
已上是等春二字や
初春

梅花雪に見せまと春の木に葉りをこちてさむかる
春三葉公経煙腹とふん〳〵此哥平定文
家の哥合内なり

光明峯寺

たれむかし袖をかけぬる竹川の水むまやにも影しらん
私云是も踏哥をよめり竹川ハ踏哥の
曲の哥也踏哥にうたふなれハ
水むまやとハよめり源氏にも見えたり

親隆卿

川

いはしみと春のあしさせてかさす耳おとろかす鶯やせむ

雅経

春立て氷やとくらん人ならぬ湖のみなかみむまそ落る
私云湖のゝほとゝ湖のうちとや

定家卿

三年ふるそへ谷こほり鶯は猶春風に花を惜ん

通房卿

名鳥はさねの床の春風に氷の枕とけやらぬ人
私云氷の枕ハ沈哥や子春と初キ私ヒ
同て平や立春を祝してのまく

立春の題にて早春初春ホはよし
へたる歟立春は正月一日に限へからす
初春は子日六日七日或十五日
十六日まてねきつし　恵慶法師
あら玉のとしとよそかりと霞内の松こよひかりける
私云こよ所とよめる説也や
子日　元輔
君かひく子日の松はけさいさをの元すけてなまし
俊頼
たかしらて初子の日ゝこそ様にて袖の下なる小松をそひく
此哥は仲路下修る院の月の御哥く
れいをとて家にいて雑にて頭君達く
並をかりてこゝひすめのこひゝと云也
よすか也て其日よ子日松をとりて御と
云をきゝてよみましゝ云々
隆季卿
あらしにも春の初子にけの礒の丸やまさ内掃る
俊成卿
むかし来初子の春にかへりきて君か松を経旅の小なまく

卯日卯杖

君か為常葉の山の玉椿引てこそきれ千年の杖　輔親

讀人しらす

色くも為葉に峯の玉椿君ハ八千代の卯杖なりけり

此哥萬壽二年正月庚申哥合云々

あさ日しや卯卯の杖の清く〳〵とたえぬハ年の務めなりけり　俊頼

みな人ハ卯杖きりぬる今ハふゆ君か為の春ハさそ　為家

私云　所々の本ニハ此歌新古書内裏

本云々年中行ニさまく見えたり

若菜　權人卿

いさやこて香椎乃かたに白妙の袖さへぬれてあさなつみてむ

私云　あさなとハ濱菜なとを磯菜や　家隆

大淀乃海人のをとめ子春されハ神の御物にわかなつむかな

私云　神乃御物とハ神供也

小弁

春ハ又たえまの雪を三輪野の神の御前の若菜をはつまん

春山のさ蕨野に出て若菜つむ妹かこゝろをみる人もかな

堀川百首　　隆源法師
春来てはかるミぬきゆれ磯のわかめにまなにつまね見すき

同百首　　師頼
旅人の道さまたけにつむ物は生田のをのゝわかなゝりけり

雪中若菜　　仲正
たつぬれはわかなをつむとあさるまに野守の宮古封清ゆわ

同　　道盛
かくゝる雪へ分園よめなつてかゝりふりて夜羽路ふ

あしひきの山かつけゝる家居よい老人さゝに老をとそつむ

恵慶法師
下 東路に春や来ぬらん雨ふるをかのはらにわかなつむまて

読人不知
下 こゝ人はわかなつむらん去年の野は去りし君を思ふゆらん
ことし人とは囲梅人ぞ哉や

六帖 春雨のふりてくれ人はみなおもひ我まつはしけんかねの川芹

慈鎮和尚
けふそかしまつなたえらん芹つミて君か七種の御物まいらん

為家
行思の柿本の下の若なつな雪まへつゝみてみやくすしる

信実
（新六帖）七種の数にあらねは若菜の野にたつねわかなはつきし

師光
賤の女かかたみに居ともあまりて老のなかゝの日数をそつむ

為家卿
小草はしむかし田かりあさは深からすなかすも袖ぬらしつゝ

小宰相
（日本紀抄）あさ雪の花野に出て孫の子もあまたそろてやつむらん

家隆
さゝなみや志賀の都のあまへ春まてねとみつわかなそつむなる

人丸
春日野ゝ烟立見ゆをとめらし春野のうはきつみてにらし
おほよそうはきといふ草よめかはき也
あかねさしひるは田たひてぬは玉の夜のいとまにつめる芹これ

若菜名所
三はら野　嵯峨野　三笠野　同原
山田原　志ゝ野
深草野　同里　古橋小野（古き也 只拾野とあり）　武蔵野
深沢小野　芹河　あさ野（吉野也 渕上にあり）
岩田小野　花野　粟津野　同原

鳥羽殿同日　当座歌　同当座歌

一　白馬　　信実

水鳥鴨の羽色にたくひてもわか庭をひくあゆる

又河せぬみな青馬は今津にあら引つなかるるつかさまる

一　御舞会　　為家

おほきなるつも升の初今日よりきこ二乃はの代とますらむ

同

八代まてかく事もそらに洩りたるしてえいつも升の声なれ

同

代乃為は祈る主の也おや升は座也なるの光は

いまも升とも精進あり

賭射　　後京極摂政

三ふに我君乃御弓にみちて文はさしてかくるあつさる

（行幸をけふ）梓弓ける九重にちる雪は白日立かの時にみゆる

慈鎮和尚

家隆（慈鎮）

あはさるそろは雲升まかれつまって高しよとみる旨は人

有家

心あるいそは世は里は常にまれまたの我座まえはひまて

俊頼
引ゑわまたつか弓の矢をなかさねは的のをかりこれは

仲実
春されはからやとをそてそことねらふ鵜らかれぬをそまかる

顕實
まこあはれされこそ引つるまて汫垣のにに的のをとそする

春駒名所

玉田横野　志ゝ野　三津野（日上鏡）
浪野　伏見野（日里）水のは
花山　美豆御牧　（カヌノ）[illegible]葛野

よこ野　きり原　二ゝき原
深草里　杉ゝき井　浅香沼
小野　志賀の濱田

右任思出注付候前後不同并文字
落ひかへ定おほゆへし此條多分師
説答也且又論之迚ニ下云や和語依
口傳ニ明まて云と下不混也連歌道隆
云仍例前ゝ句ニ似合詞ヽ下并付
為此事摂政家之御口傳之趣奇を
神しま歌云もせかうく好ても不練道

定家卿口傳句論也此言塵集讃
岐入道清世乎不重之乃書畢其
後蒙命尤依不重注書之又
貞子類尸乃出現如此云々是ハ
以前之条々開板又書加てや無益

八十三之德翁　在判

七帖之内

---

# 言塵集　二

言由緒　日本國名・　万葉哥如し
文字仕　知字変（基俊説）　草名如し
河社　鶉衣　水驛
くかたち（是何有）　有か山里　和坂の杉
鳩鶉　ぬく沓のさゝ　たのむのかり
三重帯　まくらの水　ちゝてま
二ツき　ひや　とこよ物
やまき　すゝ菊　あらせこ縄
一小井出

一古言　哥者在別紙

あまずれとは　むまるゝ事

いかるかとは　くるまを言や　いかゝ（やまとの名所）

かすみかくすとは　霞さし（霞とも云）

あらさしみとは　味の事や

よすかとは　たよりや便

五月おほろとは　正のあけぼのゝ事

かゝる事とは　咄ある紙と（云くちやすき字也）

物くさとは　物やぬきてなき事也

こねまとは　粮や　菰れうえんと添（とうし三十五文也）

文字とは　一字事也

松とは　千とせ事

一さうしとは　咄の物事

三位とは　ひんつうや

なまあかとは　生やかなる事（云し）

うけへとは　人とのろふ事（うけふとも云）

二心とは　ふたこゝろ事

よく三とは　あひさふ事（なつかしき云）

しろく教とは　千まい行ぬ事

---

無いかうとは　よきまつて事や

うくひとは　器也

いろはとは　石是也　文字を書（いろはを云四十八字）

はゝきゝとは　その通を云　也

わとうとは　天の気也　照と云（日とし）

五かうとは　白き一年のはこ稚きの（おほえ付とより）

たまさかりとは　まひきなるのたの（たりたる五七音を咄し）

おてをこれとは　かつもこれ門（ありと云也　てまありを）

たり道とは　いまありしかたき

信濃路は今えわたる道　はて見ある道むか皆たゞ行せと

二月とは　きさらぎ

なつすとは　莫つる事

山かとは　杣人のみち（三本切とのこゝと）

舟すてとは　つゝそて（りまとゆ）

しはんとは　ゆうへ

ゆきとは　矢ゆくかへし（ゆきとうとひてと語り）

旦まけてとは　表すへ更まくを（ここし懸かり）

草葉かゝむきとは　おきまくあ（おきとけ　まくむきかへ）

かりねとは苅く刈くたりし根をも云
むかつをとは向ふ峯也
しつゑとは下枝也
浪のむまとは（すゝと言は浪のむまを濱ちとりと云よ）
山かたつきとはかたほとり也
かくとはさまするなと云
ほく月夜とは月の夜や夕月夜（日のすくれたるを）
かまちとは齢也
うちひぬまとは（かりねまくらと云也）
岩ねさくみとは石をふみさくむ（るなり）

すことは下すの事
くゐまとはいさこあけの道をとつて（こそあけて）（とりとも云）
（須ハ菊丸主にとる道さかえつゝ 私云百年の…を死を供へし事…）
かくりせとはかくりける也
いゑ人とは家人也
宿ひとは宿る物也
むらきもとは村肝也思ひは（肝のむらにある也と云）
さくりとはさくる也（云なるへし）
さゝてとはさゝけとはみさゝけとも（たゝしきけくとも）

谷くゝとは谷水の事也
いさりよ重てとは手まさりよ重をといふ文字いやまさる事
いとしてとはうちあまる事を云也（いふ文字の事見え）
いとせきてとはいとせしくと云也
こひのむしとは戀人也
又ねみさくとは峯みさし
花ちるすとは花ちるさと云也
小ふ谷かとはゆふしうの事
鳥の子とは鳥と云言や鳥の子と云ふ歌もあれは注ましとす
鳥の子とは大なるかひのやうにて（ことりといふなり）しをこさまさせ人ゑとこそ云くなく

（長永日）まちかの日とはまことに永き日也
いさへのをとは鶏鳴也
あそひてとは遊と思ふてし
雨かしとは（こゝ文字を）雨近し也
ここのへとは宮のなと
こゐたくむとは比と思へは（とも云）
いもゝとはいもうとの事也

かすいこゝろくとなくと云と
しなのちとよむは しなのちとも云て（さてとも讀り）
しこゑとは 如と云々
まつかへとは 待なり
かくねりとは 肩衣なり（りうなり）
うけまとは 出なり
いもうとは 妹なし
たらちねとは 両親也
あめ流しとは 天也
いつらやは 家なり

湯もとは まことこと
志ま乃ゑとは 志のゝくと 云々
はらゝとは つまひくら と云々
うつまことは 現婦（こよまこ）
内子とは 妻仕と云（なりし）
さゝこてゆんとは 携て（れさ）
ちまめのでとは（のそとと事り）
ここもしとは 此ちとし
あすとは あ也

---

まろすひとは 真猪也
ねすみがくれは 不知國也
あいとは 海面也 海面地未審（あへサスワ云や あいうくあらしすと訓）
ほのあかりとは 眼立と云や
越とはいすゝとも云々 又鼓語とも云こと（此ゆゑ字なり）
あつしほには 夕つゝと云ふや
浦まさるとは されるを云ふ
かよふとは おのゝわかと云言や 竹（の新まかちゝはと讀り）
あらはすとは 曉也
のまくとこゝろくたに深くきて 云わすれき

せ里よろ子とは
さちくとは 華く云ふ（云なり）
たわくとは（かぐとつきさき 見りやし山シ 三ののた両浅世同き）
年もすかとは よもやまわ（すと云なり）
とおこさ文字のこと
かてかくするをさするとし（すをと云）
舟はてとは 舟泊（と云 言し）
いさめとは いさめの詞（云々）
こゝろくとは 未と云ふ 事鳥

石なこと（石遊）は小石とる（石なこ川のすさし／石のまひらや）

年やたてかつらに立やそ（くるすり）

鳴りや絶ゑい　差内ゝけやし

蟹乃さきゑいのつきと也

山乃をさきと云ものつきの（なきし）

野はゆきに云蟹のさいに

岸つきも同前

文　杉山ほなりけに

亀ゑい悠王乃代に出現や　書の有ると

方　武蔵野ニ占アかた焼まさてものらぬ君か名占に出けり

此哥ハ肩抜占と云ことや　鹿のかた乃

骨を抜て占をすることや　占部氏人ゝ肩

抜乃占をもずりけるに占をもこぬ君か

名の占にそこまつとなく

方　杉原をとこ武蔵野の葉にものこぬ君か名をたに出けり

と云哥も有や　此哥ハ葉を焼て

占をすることを讀り

（幸串）いくりてみてすへし苗神主ハこれの玉串これいそ

一説云田乃みなくちにまつる苗代時節也と五十串

たてゝ大豆をそなへて田神に手向也　田乃横子

まつらすの玉くけと云みいと酒や　いくし　書

又十串云ゝ　一説云神主の冠乃こそや

昔ハ冠乃かさしまつらすをかけたまと　ゝゝ

冠の鈿やと云ゝ　又云髪花此文字をとうすも

讀り

鴻山まてれる梅ゟすまりしにへまの苗のまよらひらり

是ハ月卿雲客の冠のかざしよ橘を

さしたると云

又ハ玉乃哉とゝに有まむ西の露霜草玉ハもとて

長櫻ハ或云ねり玉とは菱や兵ハねり玉や鏧

烏羽玉や烏羽玉烏兵千玉は上下ハ玉やゝ

又云烏ニ翁と云草の実のころま玉に似る

云烏羽の玉とそいへりたゞころさき玉れ

玉かつのあへんとは女ハ非事のあへ為ミそかくすす

---

玉のはゝきとハ女妹云も云其を云ともいへり

たゞのつまあへ鴻山の夕霧よ猿ねハえすまや木まに我まを

或云邊乃たまし為を玉のつまと云と一説や

又云玉柳の名やと云と是ハ古説やと云

又云くちまれびや落し人をまし よ里晴る

田乃ひとまのつまハ柳の名や苗すハ

玉のつまあへんと云ハ非事のまとよめるがよまい

九州云く雉ぞと云妹雉をと云と

一玉まゐりと云 一説云王様や〻御をさ〻ぬるや

一説云六位殿の玉様たまきらせ

一角さゝれ岩と讀は、辛しあるを　一説には巌
さゝる岩なりといへり　さゝれをさゝれを同也
かし廉と云　揚岩なり角をつけてぬるを
よ角あるを讀ありと云と
江陰岩と云及ま歌給云々
一山たつ云
君の越えゝまてかね山の風も秋ゆかしきまゝん
一説云杣人の木造に斧鉞を云と也斧
かといねりまで[illegible]ねよ杣人のゆ[illegible]
と讀ゝとそ　一説云小田を返すを山さ[illegible]

云たる云り　唯むかしと云後と云又山たちぬれ
とも山たつねや　五岳やといへり
一防人云　一万葉説云鎮西に侍る防人の事
両方をおほゆかりあり おひて妻の別をかなしむ事
すゝきの　こ[illegible]衛門と　[illegible]ぬいかり
[illegible]の國のあら[illegible]をそれ　たまへのきそと
[illegible]　ひとさわり
[illegible]　あつ[illegible]男[illegible]
[illegible]　かつ[illegible]　男[illegible]
為庭とさてと[illegible]衛門と[illegible]一さへ

とふ多や國に乃朝献せしも[illegible]

人を隠人といふ

一 [illegible]志とは海中の例のやうにひとしき里なり
といふも海は中の中はあるさとて云り大隅
國の風土記に云り
私云 南蛮国の海中人家ある道て
て栖と云り 是はなり
さしやうし 此海のうきやまかきをてし
かこもちきくかきまらん（えんや）鬼のちきてを
さしえて ねう人里ゐへ 更ね[illegible]

---

ひとつはちさまにね八むかしの 東はすゑに
この[illegible]乃 ひとしとするまて あけまつのかを
ちきてとふ手相や鬼とふあやと云んて
鬼のしこる年と云こ其通の事やと云けり
云り出てことは醜や尺ありしと語り
一 さしあしる代のやうるん神代のむつましき（ひまき）
さしあしとふあしを云綱やむまといふん（みつつ）
とてつゝみしとふあり あ月のとふ（むま）
ゆ人まつ宿の下は撫ある言まむるて
さ原ねやに 師説云 夕陽くのとふ有月

日や楚よ作て夜ハ夕乃月や朝作く
日を朝の月と日や能乃夕方よ向といふ
よそり朝作く夜と云てすいあまさや是を
口傳多よ人の中よ月夜ハ夕方朝て
よるも夜と云ふ事ハ此異の事也と云り

一志らぬいハ作くしとい西流や　つくハ白縫や　つくしハ
此すハ住ふ類てすくとそ志ぬよま併し
不知火と云と（昔景行天皇足羽郡發舟し行て此の国よ到るとミ有り）八代と云浦乃火の又しもとると
いつまの火ケと四語よ詠人の多りう
火をも不知火やとよもまろ記を知よ有記
作くしといふん言の枕よ志らぬいハ作くしと
よめりとそ　大国を今世ハ肥州と云よ

一玉嶋川と　松浦乃鏡すハ
玉嶋川ハたてし姫の跡つるを姫川也
鏡乃浦ハ松浦川よあり　昔女男れてこ
かも形見よ元てある　此川よ去り三里
より鏡の浦と云よ　三里許隔たる
宗や鏡乃神と云ハ大宰少貳廣嗣を
神と崇りや此社ハ玉嶋川一宗や鏡の
事よあまよ乃次て汪きやかし

一
鶏之鳴東子
今ハ諸人ぬ知る不知江や
あるかさく　あつまの国ま　御いくさ給
けゝりて　ちかふる　神代よりと
まうかね　国をとらんと　皇子あり
まも給へ　お（知）ほみづ　太刀をつらし
おほ手る　あらそひし　れいくさをと
伝と思ひ給　その人これ　浪ゝ此ハ念ゝ
いつこハ　一念と我すれて　吹すとる
小角は念をを　あ（歎）て（乱）とる　鳥かやかうと

もろ人の　ねひ方まてに　さうしあられ
情のうちきい　我ハ乃こと　つきてある也れ
あひく（如）ここ　略之
一衣手　常陸子
昔御門の御衣の袖の泉の水にぬれし
よりひたちと名付ところ
一人（百も）もての　ひたちの国乃　二並乃
人ありけり　君かきますと　あつさまゝ
おせかきわけき　ねと寝する　うき吹のうら　略之
二本と二本ひや峯二ある乃見まく

ほしとハ天んふるとや雨をまちかねて
てのほかくらしさまつさ沢くなるそ
をうて下すまて楽のてらし治
にしるをとよめり云々

一霞乃廉路なり
あられなりといかしかまゝしきまと訓也云
なるしまゝと世俗ニ云もかしかるしと
云んや猿の袖を廉路也と云るハ
神功皇后そろうしきを給ふ時廉
路香取乃二秋三月神遊日同

丹きし廉路立とゝ云や
一霞乃かきれ神を祈つこすなみ草に護臣を
まちるん草とい野民のまつや云
民乃草葉なとて云ありしてや云
一夏乃引くあるんなり
夏のひくらおかそて武具しまを二舟ニそえらんさ世学なり
夏乃武具まとる不織生と云乃乃ひくと
おきつて章なるや麻ハ上はれと引まる
短へなり夏のひくとつてきしゐま
一細（こも）呂（ロキ）十年

せする説ゝ有又一説には神籬と比義（にぞ）

宮侍（ひもろき）と云一説には神供ものに贄を云とも

云り仍て哥にも神のひもろきはかゝる人

はなる神と詠る一説には胙（ひもろき）とも云り一

説には膰（ひもろき）原と云父母は物故をも云

離（ヲトコ）ひは男もなはたゝいむとえいふ人の心はまほりあへぬにも

いむとい云一の字なまり

外（ヒラ）花も外の日もろきとはぬ全てうきものにもなくなきを

一 夷都なり

諸國の國府を云や西海さかる夷とも云ん

幸は西中は天まさかる人住まぬなる

西國さかるひなと云るはいくらかや

一 わたつみとは

両説や一には海神の名也一には青海原と云

若海神や一説は海底を云て海を知る

はたうみと見しる説ゝ

和名義云和名に海神と書かけて悪つ太和多都根と

わたつみのをにまかりゐるとも手向む

かきうりやてふたをきとかけてとい

なん為の河を一説にたつみのまとん

錦むす萬をおつむと云は錦つむよしと
まては三十九座のことなりとあり
私云こゝハ一つ浦と云ハ唯海の名と成へし
只川ミ三云ては云ハ海神の名とも云人有
但作れは古人の説はあるへくハ見えす
て用るや定家にてのをしへのとハ私云
ても其和哥にて用る事有ましきやうなり
又古よみのうたにあへとて用萬葉の
哥にも林叟まて用捨とも云ハ其為なり
万葉の哥をぬきかへまてつゝれ鏡作堂

さまれは一括すにあまたの説をとま
てやひろくてはそこたちや連哥をまい
むいつれの説をも此の説を体用
あらくれかへるかれおろかには自見の
まよはすまじくて用ていうことゝ云侍や

一青丹吉奈良京事
定家卿説ハ青丹氏の軍に勝しるし
所やに例青丹よき奈良と云所に付たる事と
青丹と人の性やらと
一帛（ミテクラ）を　おそまり出しく　のたての

かつらにいへりとあらはる枕とはすゝきて
石が留　神子ひ出よ　あさえよつく
まけて　吉野へと　へまに見ゆる
略く　二あミと付るゝ細なりも名字
につくまり何事とハ名字ハやたて
れ　麺つゝとはほとこつてまん、うち花抱
ヲ
東野烟の売不足て、かへり見すまても有かたきぬ会れ
此東野ハりの安騎野の中ゆあり
とき大和名所や　伊東国の野鍛
ふりみ連ハ桃名所不見

---

一万葉哥音之
一三ハ真名仮名　一ハ正字　一ハ仮字
一ハ儀読や　一ハ霍公ほとゝや　芽子萩や
黄葉（紅葉く）　川津ハ蝦や　日倉足ハ蜩（ヒクラシ）せ
朝良ハ槿や　垣津旗ハ杜若や　乳鳥ハ千鳥や
秋津ハ蜻蛉や
あきつとハ蜻蛉羽やうすきを云り秋
は羽衣とよめるハうすき衣の袖
おかりと
打背貝（ウツセカイ）　空背貝や　春鳥ハ鶯や

三五夜は（十五夜や 名月や）
あき洲大和國とい 昔神武天皇天乃
石舟に乗給て葦原の國を見おろし
給しを云々
天の羽々矢とい 神武天皇の御矢也
はまは呪のきうを同お 水鳥とい鴨の事
丸雪とい霰や 栲細布とい横雲なり
小沼とい ひや 苗莫とい細なりや
不絶とい涼なりや 風流とい曲なりや
多集之ハすまくや 無用とい いとつき

梁身とい人のことや 入風といすきまや
日月之ハ祁と云なり 火氣とい煙や
悪水とは濁や 左大とい まてやま沖を
左右袖と云り 破廻とい ゆうりや 求食とい
あさりの事や 嗅鶏云ハ清ゝと云心ハ十
云々と云し 馬齢蜂若といひとをと云事
馬齢蜂若石花とい いせえきと云言 金風
とい秋風や 白風云同なりや 商風とい是
同なり 哀兒とい みなきなし 楽ゝ波とい
さかすゝや 朝鳥とい為自然なりや

細竹と云ハ竹や笹や同流十六名あれ
ハや鶏鳴露と云ハ暁露也十六と云康とは
いくひと云ハ国と讀あり

一 日本国名事
浦安国　玉垣内国　藤根国　秋津国
と云日本国乃称ハ六人天子と云出せし東ニ
向ニかれは似たる也と云　日本国　和國　芦
原中津國　吾國　波早津国なとい
難波津のな名也と云

一 春過て夏きにけらし白妙の衣ほすてふ天のか
く山衣ほすと云ハ哥ニある也衣干と
云事ハ耳櫃の明神とて人の罪乃
実否をたゝし給ひしや其神なり
衣をぬらして干ニ逢ひかゝ実罪也
罪干ぬを実と云川社乃前ニ七日
ひさしとよみしをそれはや

一 宇治郡事
山城国　宇治郡　近江国之内郡
両説云々
三条前右まてとれはしうらは郡のかり作ル也

と云哥ハ皇極天皇の御製とかや
光俊朝臣の哥ニ
やまとなるひらの都のかり居ニ尾花乱て秋風ぞ吹
ひら宮ハ江州のさゝなみの
都とも云ここ草かり葺とも葺
葺と云り尾花也

一賀茂社の事
上賀茂ハ別雷社や露器ナ宿を
（とよき）賀茂山のなかれと云り下鴨ハ多く須
社や号御祖神也賀茂御祖神社ハ
日向國曾の峯ニ降りたまひやまと
葛城山か峯ニより山城國岡田の
賀茂ニ居ましまして大堰と合葛河と
賀茂川ニ並座て見まして石川
の瀬見の小川ニ居と云り見ゑ給ハ
こんまり給と云云さて玉依姫別雷
丹塗（ニヌリ）矢をとゝ下るを皆式神なりと
なれる事細ハ日本記ニ見へくわし是ハ
大旨目安ニ注許や八尋殿を造り
八の戸に扉をたてゝ八腹の酒を醸（カモス）と云も

日本記には日やかをいと造るとや
天（一方ソラ）乃足（ミ）河　大和乃国の書冊よきこと山
越之
ちる寺乃　宇治のさとの　橋乃たの
あこうの宮ま　（田）略之
ちやふれ（同方）　宇治乃さとの橋乃やもと
足ほとりまて　あふさちの　逢坂こえて
男之　ことうと　宇治をとこり　太子の事也（云）

一 級照（シナテル）てり
志なてるや　片あすは川　さにぬりの

一 大橋のうへゆ　くれなゐの　赤もすそ引
山あひをて　すれる衣きて　略之
飢てるとは　飢人を云や　照日や
日数のかさなる飢之と云り　太子の
御前も此人とて　去ゑて　かれ下候と
て云しかりや

一 朝毛吉紀乎
あさもよひ紀人ともし真土山ゆきくとみらむ紀人とも（し）
あさもよひきの関守かたつかゆみ　ゆるす時なく
略之　あさもよひあさもよしと同事也（云々）

右昆　定家卿の説はあさきをよみひとには
あさきとおもへるもハ云や　鳥の食する
薪に釜にきの煙也　又云朝にはまきを木
をたく火よ　あさきよあさきとよめれ
とを云つり　あさきことより紀とも云所か
下品ハ　昔人の妻のことよ　隠しるべく
紀伊国なる報しる事　則　是也
本式の昔は木のある矢にて鹿をうひて得逢これ
こまつも式年する矢そあるやかけたる矢也
一　ひもかゞみとは細鏡と云り　氷の如鏡なるや

灯乃明石の大門は入日をやこきわかれなむ家のあたりを
赤石と云り　譽田乃天皇の御兄のおはしまして
所とも云
鳥のうを淵田のとる事につくる日より　みえぬはいさの
この二首は武内大臣の御言ぞとは
朝敵忍熊王をうたれたる時にとくるを
よまれたるとぞ　麛坂王
忍熊王　これ二人ハ應神天皇の御兄や
一　あさまくと云事　忤設と云り　所懸しるもの

梅花咲ける園のほとりへハ桜の花乃咲かゝらぬ
この前をかくしけるへく書かきまくらせ
るまくなると云し所思ふらんし
すへらきの南の苑におもしろき花の秋にも春にも咲
星乃一字をすへらまと讀り
住の江乃岸の松ねうらさひしとよめる者
唯事あらぬなるを
古人のきゝ田男めつまとひしうなひし女のおきつきをこゝ迄
おきつきのそこはきとも云ゐてすや
故人の撫とも塚のすゑはつかとも
うなひおとめと云やし女塚とも云し田
男うなひ女二人の塚なり

一 人丸同名事 一人上道人丸 一人玉手人丸
一人田口人丸 一人楊生人丸 已上四人に
此内田口人丸兆二前人

一 神岳とて神山と添り 一 三輪山 三室
神南此是皆同山也 味酒のみむろとも
酒のみとも讀 酒は讀ふるなり うま酒
とも味酒やせ

一 吉野国栖なり

神武天皇之御時岩おしわけて出しつれあるものゝ尾おひたりとそ名を問給へは石押別子（ヲシワケノコ）と申しこれ子孫也神武天皇御時始て吉野乃国栖となるなり今もとも国ありやなさひ山菓栗飯なとは国の貢にたてまつりけるやみて葛山乃里毋花をもともこそあるしれやこまへ蛙なとをも食とせり是乃大虹（ニジ）みとしての字雅也

吾妹なをあはなをにすゝきをあはれはなさ袖かゝはのさむと思へ

あはと云我と云詞やあなをたまはは同てまく袖かる川袖ふる山神女乃天下て袖ふりし所の川山なる名とそ

三芳野の蜻蛉乃小野にかる萱の思乱てぬるよしそおほき

あきはの小野ことちのそれなけるよはをのとい日雉といへり日本記ニ委見えたり

一 右云事　　俊頼

こへしみむろのにたくへられてをすみ草くさきとなれ（すくもされ）むらしの草まさきかまや見えられてとな

両説有之
一にハ水隠や一にハ見てしられぬをすみくさ
くさとハ俊頼の説にハ春霧なとを
一説にハ百千鳥なとかはる草也抜
なるハ大和物語にも見へたり
訓なきてす又きつみえさるなるを
に百千鳥のさへつるは漢りならとも
眼訓やみやりしらんも目かれなくをす
ともよみたしすさむとハ一ふしに
人をうとこゝろわれとも見やへむすさ

---

次駒もすさめすなとよめるハものをさけ
ぬるにや駒のすきむかとく用捨也
はやゝすきそれと云のきらぬをすさ
むと訓ハ用すさふ也
百三十
大あらきの森の下草おいぬれは駒もすさめすかる
人もなしとは降よりそにかりすさむと云人
もすき絶さるほと同ん気分けけ見
とハうたよのさてみなへ
下おかりけみせて春日なり所望か見
こゝゐくとは来とあて下こゝくて書り文

云んなりと云云にても用さり
たゆたふとは 萬葉歌に 舟の浪の上にゆらるゝ
歌には 又思ひたゆたふなと云ふ也 思ひ
さためぬ心なりといへり 人の歌にも とそ
我思ふ人の歌に 大舟のゆたのたゆたに
おもかるへきと読り いさとも ゆれとも（云云也）
しなきとは 下葉とは男とあり 使の心なるを云さ
なきさるとも云ひたより なるよしと云言にも
小川さをしぬ 山中に開く見ゆ
みたれ間を無く 立（なみ）来れ

まにくとは まねくと云云や 通云とあり
こそ庭とは おほくと云云
うこ庭とは うこてくなり
さるとは 春されは 冬されはと云し此春は
冬つと云同云といへり 春さり冬さりと
云は春を来つと云ことはや
しみゝとは しけきと云云や
とをゝとは 万葉には十尾とあり 草木
の末のたわゝのなひくを
たわゝとは 多かるなり

いさゝめとは　いさゝかの義と云人こと　公任
説ハかりそめとよむ云々
いさゝめに時まつまにそ日はへぬる心はせをは人に見えつゝ
これ哥ハ心をいさゝかなるほとに叶へり
三渓しとは三川ともかきならひしもあるしや
三川く花の色さつくなるとによめるも
あまたかくれあつまれるえしるをとし
玉つといハまもるなる云や　わかうらと文字とに
こゝ人りかす
わかうらにハ上人あつまる浦まてなられつゝこゝろよ

---

此哥もよみ人しらすと人あらいと詫り
よくつらとよ山了と師説や又さる
和歌葉と此時なるねを玉つ集と
云事をも世俗にいへり又しまれなる
人歌
すゝには多集とさや云んや哥をもよまを
いつ学者とも云んにと山をもをも
り世庭をせなとをそやいま人まとこ
ちかくしつねんや
玉挺ちとは　ちなるをと云　云なる

し涙かれぬ露も涙とそまかすなき人ゐるやと秋風
此前もちりたる人は叶へり
うかくさいかこと云云やられ涙のうき
と讀つゝ也つれはあてなるよせしるな云
なまうゝかゝる人と云人有と云説不
可用云ゝうたゝる人りあつてきて
そやと云前も人は取つてきてゐると
よそりとこゝうかゝとよろんきる事
人はあそこしそやとよむへし
不苦となしうたと云云や其の字をかし
にとよみ本哥をあらす草にをあら
ねと詠も作ハ本哥も草にをあるね
ものやさまゝまやとよみ作のよれ
捨り事しかるをあら涙
心ハなくとハ両説や一ハ心付なくて一ハ心かく
なくや
一きしとハ書なれ心よりハ涙然し心くし
なをハおなしなりや爲しと書り
なけといはす涙なりと云云なけゝらにのひし
このおもなけれなきけなとゝ云をなや

さりぬるけや
言まうく云ハんなきや甲斐國言やと
ことは在なるらのさことゝと讀侍し
師説やとことゝとはよます
かて且（カツ）と云云やなと雪のつれいゝそてまとけ
つとよみたらかつゝや消て色そ
なそて云その難と云や色かるまく
ことふ出てとハことゝ葉ふよいてと云や
う川しくとお うゝしくたるとと云く
松かけを燃盡の後燃なるゝまあられめ金油の上氣
此言もうらさんて取しるんくそ
こきたまてとい八雲まいらくと注をられし
り雪なそめらさしられまなん取らきた
まて我ニ張られて我同云や
ひらふ類とい永くと云云ひきすらふを
一向にも叶しろてと葉や
かとい一説いかこ川や一説いうこつけてさ
凡の着物のことあるさとハかことあるま
なまひきち常のことも両説くのこう
言しを叶しらかこゝうかを叶しるさみい

五音へとて源氏にこそちゝきなとゝこそ
たかりひきうけしてと云かこつけとみへり
趣かりとてひゆなきさと云云是こそあし
手むもゆるふと云を是之手にひき
すきと云云云云
いふとあるをふと云云や云をさふと云をお
しを神へ云をひ給ると云云をあり
うひて措するすと
大らかとて翅やそれも同事云云し
うらすゝをみてうら雲ゝると云云へおかすと

すとて云衍とて云云
あれそをとてあそひ居や万葉にも云
風流士と書てたはれおとよめり色好お
ここをそ云やたはれをも同心云云
つかれまとて時の風前草の清のあひたと
を讀りあひてもかれなる雨なとよ
なるをまかせすや
行方云々移へ當のまて行方ゆ移り
元と流人のれよみ子と云もらつき
さゝとなとさへしつれすしさてさとつ図

なまて云や
あさかほとは　つかなや　あふなきと云之ミてや
里し花のちりさてひらくと讀り
いはさへさとは　出さはへさはなり
ちくさとは　千草なりてもゑや　茅草苅
ともなり
ひとなみへとは　遊わるを云や
根こしてを根しして　にも云根河みへ（丶の来）
かへとはかくつや　うゑの人へも傳の人あまを
源氏よりへの人乃おもひ入ことをすと

云もかくりてや本乃竹抜なり
ミやひとは情や　八雲の御說　其源氏よりを
伊勢物語よりもいつりんのやうよする說
偏かとこすくあるこころあり舟乃ゆ帆と云ハ十
分ありけ云人のまはてもみえぬあるとゑハ
ふうりくくらしたみてぬるりや
遊女をひく云て　やさ女は中さ殊し　源氏に登
じやのさはもゆをひくもといへりかさし
の油も遊女をむかしあつりまを云へり也る
八雲よりは係ともみえて候

さゝめくとは　さゝやくやさゝめこともみしこ
を同なる事に耳言とも云て見ゆる
とよめり
こむとは　来むと先しられなりや
あら海しきとは　あらくしきや此の意也あ
うましきなと讀り
うたゝねとは　うたてと云言やうつゝあらんと思日
むかれかなと讀り
なみこそ苗とは　人よくしと云人は
うへなきとあるなきけなきさるは

なゝとは　やうしとよ云や花の中夏を祓し
ちりやなゝあまてと云も哀なり
あさむくとは　二様なり　一はよしる人へ
まとあさむくとはかそふると云と雅かは
秋のなかくすり　あさいそてとよみあれぬ
行くるくて　まさんしゝらんて
（千和）ちなにし河とは濁しは名のし河や
なまとは　をまし　なうとは海なら
あきうるとは　山川里なとにあれ
うりりしるかなり
をぬりましとて　そのまゝしと云
云かし

きのとしゝとは　とゆふしたゝとのへ

すりかりきぬは（あまり）かはゆると云てすへし

すりかりきぬとは狩衣にすりたるかたのある衣のこと

これは人とかめそとかゝかきて名の立ていふ

鳴ば鶴一こゑきこゆれとよめり

こころもみへとは　何事もみへくと云（と義也）

老さひとは　老と云なり

翁さひとは　老てよはくなると

こゆるへると云は　老て悟かはると（云々かし）

仁和の代おかくりすも　仁和代にをかくりせすとは

家かうしてすみけれ見れ思と云をう（思ふ心）

しなのまへとは　我地て鍋しつれすへし（云ゝ地と云もこのへし）

おほ鍋とは　杉のむすゝをとて（云云し）

雨さむ（?）云とは　全葉と云やをのすゝせんかとて詳り（ありてとは云るり）

うつされなきつとは　おほかりよみしとうえらうをさる樋に（ちゝへうされと云同すと）

思ゝ絶と思ふ人らうされ家をれい

笠しこし秋とう

思ひとは　ひとへ火と云云や　山城の玉思

ひこうりと云し　ひとへ干思乱しう

やましろのゐてとは　山城の山

と云名所を一ことなる山や駿河の府
浅乃宮の新宮ハ上乃山と云や
をちこちと云ハ　あちこちや遠近なり故
よりをちかたしすとよりも昨日よ
りあすハとら須之後乃と云ゝ
まれ斗よといさやあらんまゝ前と思ふ
ぬま頭あるまと云へり　近り
神さ字と云の心神ま、かよふ須ぬのすゝ
たるふ所とすひしらてさ流云や札
室とハ本るゝとをかきさひしらと云り

うらさびしと云や浦のさびしきあはれ
うすらかなしうらめつらしうら物を
から雑思しなと云云思くしとはん
所しそれより塩の浦のうらさびしく
を見てはつれなめと浦うひしろ云ゝ
かすいら川をと云　當や（やゝ川なり日本海なり）
あふさかれきさ云ハこすりしく（ますとしる意）
こえりとてこすると云くまかくまて思ふあ
るいひしうきてあふさ互のまゝ代
三所を二のこゝろと云

夜とくたちとハ本字のまゝにくゝる様
（すゝむといへりくたちの義なり）
又夜をこと云事も此心にてさうれたるをいふ
只盤ハと云云やもしやすく字く
心々とハこゝろを替と云や
心つらしとハこゝ浮うらや
心あてとハ心にかけたる事や
さゝやかなるとハせいくやかなるハ狭字なり（細なるを庭もとを月なくなり）
年をすゝめとハ年もやふけぬるや
ひなびたるとハ田舎めきたるを里びしと云
と云も里めきたる心ゝ木さひなめきた
なるをひなびたると云ゝ源氏にも見ゆ
何おや物けき一物為中にいかあれ
なとゝ云をさま多ひゝるなとゝ云て
おりと云々
うこやとハうかやと云云や
なへとハをはりと云云や即時や花の
散るなへ風の吹るなへにと云を只即時也
我門にいなおほせ鳥の鳴なへにと様
あやなしとハ無益と云云や又あやにあやなし

と云ハ文（あや）をと云也 物の紋をつくねんごと
いやとしのと云 弥乃年やと文字ハ例也
やとしや 毎年
常ニ云へと云 二様と云云也
このまゝ峙もこハ式両枝両や 一説ハ浅く山
可振て以子那しと云 一説ハ大井
ほ有と有し 云云
すみかと云 さるかう 是文字下とも云と
ひらこちしと 一向と云んこと 用て又とも云ハ
いつり

いやましと云 弥まさりなれ也
しきなすと云 しきりなるのことくと
言葉ぬくと云 露のとみ草にしたく結ぶとも云 又梶し来ぬくと云事
何ふりと云 袖まくりや
越まなりと云 紈扇や 堀川百首中ニ
納涼哥ニ 泉ニ手ゆふまくれ
のとあふきを雪にまかへてこそ
かりしそり婦れしるとまとまきりとんは
信て不審ひらき云事 了を自然て
かわりてもいうらん ひかねゆくみへけまと

おほえ侍る

ゆうしのとは人はかく書を云や

こころさもなくとはいつも所と云なりや

的之あるはやうりおもわるゝき名所なりけり

らしまと井とは引のてうへうまは的射也

ある所そくとはやうしま所也云るをと（あすまらあまうと云や）

あこむとはやいくんて人いするぬと云（しるこむ月云云）

いとなまはいと雨ありさと云や

うかうとは昔石をそのうりは（云る）

いとそかしうしとは思ありと云（云る）

かもあやうりとは目出度人の（日殊なり）

宗にとは（勝と負てかたとよりまるするを宗なるなり云し殊ありまうりと云なり）

冬夜の草はわもとにも中ま花光云と為人のつまなりと

比帝もほしるまわをまさりておもしを讃り

むをぬとはそこ限るやく霧よむをそ宮治の門

かくとはようかうしもそこちるらん云と

ちりとは汝うやたやりと云を汝や

りう地はねえなり

ゑつたりとは徘方よりと云文作徘ゝ徘徊と（云つり）

二はとは二南けとはぬましかくまれとうやちる

此岸の袖かなし　是やこゝに讀り吉雅
川まで舟ひのしつかを岸ともとて
云り舟かもひかりはくや
月よおもふ月なをたちやよ流と云々や　月
　おほきさいましくをなとよめり
うまたなよといふうまつりきと云ひとうまつりとく云也
　り卿しといへり
あらめとは　外国よりかと云
ゆらひてと云　世りをると云々なり
　源氏みもいへり
ちやくよりは　ちくまさと云々や又
　ゑ卿しと云心を有川のなくなりこゝに思
　うそりかなとよめり

あられてとい　あられてと云やあられて乃世まてと云て
　ありつくかをと云をりまいらんと
えたつと云　縁や　えたまへりしを源氏に
　更讀り江と云題にても讀りて後
すこは思ひてと云　すこしくすり思ひてと云々や無く
なきにあつ筆てもと　まきありく趣すくしなき
　海乃すらを北の見上るなとや嘆
我川をなきにあけく源氏を讀り
うまやと云　とやと云々や諸王かあらすうまやく
　と綺をまいなとよめり
まやすしまて云　為ようなきと云々や

あさなりしと　云を言はれまじかや様を
ゆへすまじき事や草をも殊に言
かくしとよめるも言はれまじたるにや
三中とは中と云々またもとは五音を
里まの心かけ三音乃三を中ふ
のも中を出中や
源氏とはめらうらんと云々や一万葉有
あまたまつらん年のをあるくと清有
まいらんともんて有
あま水は我と云云や

かゝるらうとい（くするらうと云<br>ことばや）
たち山よりかけの雪とこゝよりすそ流るゝがくするらうとて
この哥をくするらうとよめるとゝと
さするとはようすと云や悪の字をさかと
よみ侍悪をさかと云をあしとや嵯峨天
皇乃御代に内裏の門に落書をさせわ
無悪善と云ふものを諸人不及
小篁こゝろえて是ハ吾なりと云たる
ゆきさ海なりを道門が和歌と云ける
とつりさるゝをもてはやされけりと云

落書云

八十一之徳翁　在判

---

# 言塵集第三

鳥草木言

文字仕

玉もゆらにとは　心乃揺てゆるなると云や

むつまかとは　夫妻不合の心と云と

うまてうしとは　祐うしと云云　やうまてしくて

あかね舟なとてよるなるを

ひよまかなふとは　ひるなるを　ひさしくつゝく

いさらまとは　いさゝか　伝えぬなと云云や

おそりくは源とは　山なとおりて下をつくるなる

まねきハあひむもこくさ給人のまへへき　解

おやとあり

ろ左手のはうちる字の眉ねきこえあひむもこくへをあり（あへて）

左のまゆの毛をぬきて鼻をひてひもわとる

ちまち人まおや〳〵と云こ

出てゆかん人をそへよすきに隣のおみ鼻かぬ

出行のはうに人のたちをとひろみいきて目

のかりをいてゝそまゐるると云と

三編のすかこもとハ両説や　一説にハ薦をハ十

ふにあむやと云　奥州にありと云

是ハこもをあむ所の名物にこもをは

よりへたりときに　又似たる三編のすか

こもとよまれたり

ろみちのくの十編のすかこも七編にハ君をねさせて三ふに我（寝ん）

此哥ハ君をハひろくねさせて我はせはく寝て

つねに祈人と云心と云と

濃人とおもふへんのそてあきの純はなや

すゝのね根とハ寄りをたにとあり

むのとハしのひをを云よき絃のまへて云

玉乃をとハおかふをすまるむてむすへきわ

と云はよのきをとあえも給云也

燕乃やかとこと云燕はつはめ也と称云人所八子

とんのたふはひとことと云々古ニ首有

燕のやか子のきうひろうまてよとふうい

子ありきすへてよろ錦也

下

夏かりの玉江のあしと云ふをきは江也

夏うれ乃るは両説や一説は夏菊の茎や

一説は夏楮や又云夏麻云々昨説は夏

菊の茎や立秀うまきと云能言羽

ぬけ麻と云人もありけは両説有て其付き

すゝてて甲所又夏禊を麻禊とも云所菓

後と云々五月五日前後の禊と云へり

河社の事是は両説や顕昭云夏神楽也云々

俊頼朝臣云川邊にて神まつる有云々

川社とのは杉又は衣かけなとして七日ひさくん

云々や貫之か哥にも見えたり後拾遺

なとの川の清くきたなき不必水神乃住所也

うまき篠をとりて棚をかきて神供

そなへ新年云々無実かひたる人るとか

祈はなとなく事の見えすりを七日ひま

よめりと云こゝろはたとへちりひゝみと云人にこそ
読り古人乃云無実おひたる人の衣
をぬらして水神の前にて干すに
ありなる千々の上にあるは早干く
無実やと云り是をたゝし給ふ歌也
三ゝると云草をとりて結ひ合給ふと云や
くゝ乃恋ひるといふ子をかゝすすさなとある
てそれはなにまてふと恋ひると云こと俊頼髄脳

山家夏月　　俊頼

山里いくれなる恋ひるはすむ月のかけにこそなまきゑて

三川りと云雪消の時来たり氷をと云り
てるて生とに水を含せたるを云にて
ふむあまし女のやむしると読り俊頼云
又云人の手ならゝ合たる掛ましゝ物と云
みくさみとて水のなみ浪をふかく云
にあこ付したるをとくするを又云とも
云けりや
涵布とは指人のかたつき紫のさしたると云こと
まこのすみさなまかせの男そのこ入りてたとふく秋のなた
春のまたのぬれひさしつおれ袖ひかをと云門て

菴つむとは　急するを云や菴につくりし昔の今でなる

一とやと讀り　ふたとやと云もあり

山かつまでとは山片紀と云り八雲には山のかつやと云と

夕陰は山のかげくまなるへし

夕暮山かげにて立る鳥の羽音よ鷹をおいてつかれ

この前の歌は鷹そらすとも云れつ句

無山路までは名へけ嵯峨野の説によし

志賀清く　三段体なり　同物や

お園のあたりて其人を見る程にて手をおりて奉り

侍でのなようしやと云に記すなりとも

---

主人一同なり手拍打まや

木のもとたちは　名所見来る所を見よやと一

説や佐理のそうらは別なり見いまる所

説などうしのさかれなりや

西海まてかる西海のまくかる西説へ後ぶ説志は

おれまてかくや　清補説は　おまれまくかゝし

いつ迄もいそしまずにより塩干なるて

まてと云具をもる塩のみちねさきりと

いそくと云まく潟と干潟なりと塩あり

志ぐるかを又まさもうつして今塩ふり

宮のしをてかうなりて読やと云〻　是も
しほれにしみさきまいりきぬくと云し
ハ雲まいまてかゝれ説を用や
云ひをよくと云人まあまみひもとくことを〻我
本いて下ひもとくるとよめり
むかし業平あくと夢見るとき我思を人ましらせよや
つかさのとハ十限と云り　道遠きとは限の那は
まかと云ぬ限とい罷の事とつまりかくまや
そのしあらとは海人の子なとは海子前人なと云を将
しるを云〻亦ハあまの子ふ云といへり

ことまてとは旅田前なこまをとよめり八雲にハ
風るまやと〻　私云ことゝ田てとは田なる人の
うてまはるとあふて来てと云けり　萬葉
のいやこ田舎人乃かもれは説上に不及
てゝのや田かりをやと丼あれむかしはとよむと云や
戸も他たゝ田なるを読て可尤
やられはきとハ十代まてと云〻云や
色しくのうちとは好色をいへり
三日さ衣の云花のまるを云ひきりしら二とおとゝ云
の一香まよりを云や二一日々むと同るや

こほこほと来乃衣川のすゝや　こつゝりま和山
　川とよまる
ちるやすると久すると云や神なとも松かさと若木なと云
足ある衣とは蓑の替まきたる衣や又身かため
　なとの梅枝なとも云や取代草と云も
　　桜乃麻の人取なり
うへ衣をとりて云奥とる筌のすゝや（字）はせひなと
衣川と云魚なと取るかやは罪と云をは
　頃は衣の内りして奥と衣て衣や
衣の手かりとは後朝と云夜の衣おもひやとこそとも
　のかりある者のまひある
布かへしさね衣にこそ布乃かるよぬのするの
　破きりて浜松をさけるまの似たる
　一とへ如や
鶉衣とは衣のすその破るまゝつゝれの毛乃似たる
　云や
ほうしとは捨衣なまきかりしまをいへり
あらひくると云森すや又唄やあらひく色と
の子とよめりよるにする（絵）あらひくは
衣くるまにて又まとたて星終日のあさ

すしなは八雲には日の明方なと注説や
あからひく色しく人の子とは紅の匂る
ともなる也經て露なり
水鶏（くひな）とは毎夜の鳴はやたゝくむまやと云鶯の音やとそ
なしともぬるとも鶏と云や源氏にも水むま
やまておもかけぬと云り　私云すゝきされ云り
ひまゆ弱目かゝる月の影なと云は其名にた
え云し
天ちゝく秋とさ海くるに云り治定乃説なれ
初吹鳩吹獵人のする山賤のするふといへり

むかつをは足ゆむとはいへんとてむかつをとはよめり
青旗のすゝや　天智天皇の崩御ひし
時后乃御歌なりミ擬く後の斉とミと
くろたちとは姫き人のするにはぬすまれの黄石は太
しんたる湯茂清と云事也といへり
ミおほみつは乃墨乃くろく清きれてよありおほ海
かく承のうかやと云と
ふる峰さとは雨白雲もいかな所やと云と仙郷を俟乳云
ひさかたとはくとはひさかたのかくれちてむとは云ありき
ミ游女のうきさらてむと云つり

駒かへるとは人に出るを人の家へかへるハ帰てと云と
又云駒かへるまてつく駒出ても と云を清り
袖かへすとは何とも云を立らへ人の袖に
まとはれ付と云や
妹背のかさなるとは妻のことゝ男にあすさとし
やと云
かさゝきのつえとは越中國弁阪の林の名にあり
女の男まさる数神人の村と云を濁てよ
妹背人のことゝ云し
かもとはむすびや後成の硯やそうかひり
又垣の其乃鴻とよめり
鳩の子ハ山鳩の雛乃事と云事不可用し
定家ハのましかや昔鷲をとる雛也
有りとも侍りと云〻
又人鳩乃雛にあらすして其形之もの里との名の事
伸正式前ハ鳩雛とハ羽の二三まてゝ鷲
のとひつきわまるを云也て侍や
鳥のむ乃かりと云為侍や田面雁落の雑也と云
麻稲と鳴こや雨にむかしの五月あり
たのりの鶴やたのむをよまれしかと

山路へまの田のもといひて居と山路へなきあれ
あ浪るまいといりて用る
三重は常ニハ広すやうてに常は常を三打まし
たまやうニつねの常とニ可申へく候
やをうりもをりとて万葉哥也
山人の水とは神の水ニ云 又（堅達）有りかきなし
三もいへり 後成て清輔朝臣あ浪ニ云り
人三重とは神功皇后の御うしよ大きさと哉
右の名といへり
三ふさとは足引の山とは あ浪ニや 一まはは木の精と

一 杣人はまさかり木の事との名也云々
とふさたて足柄山に船木切木に切之川あたら舟木を
此哥ハ杣木切るれハ末を切て株の上にさす木
の末をさして山の神をまつるとて精よいふ
事といへり 木に切行つといひさしてよめる也
一 木に切ゆきつあたら舟木とは杣木を
切たるを流すてもちいる木まて切りけ
たるとは舟木ありをねたる也 いはあり
切ゆきつはあたら舟木の舟と注り
足柄山ハ相州也 此哥ハ筑紫観音寺

の松木の時の哥に此外富来磨居に
是筑前なるをあるか山と云山あるなりや
覚束なし
かくましと云甚くきまし夏へいまく時かさま之來
てあると云皆かくさけるんや行説とこそや
侍りけるにや此を清輔抄なりし
須と云云とはいへり
あさら深塩干此ゆるにおもへらはぬ事なり花の色におもや也
あさうたゝ名所やさけらぬ處いとけるなれ
花やや咲あるらひらきぬとよみつゝとる
こよふ花の陰にまれさかれおやゆさ来
なからひら京次と讀りといへり塩の中さとは
甚らなりと云ん歟万葉におほし也
羽鳥ひやうふ鳴蛙ある二こそ我こひんやは
此らひ也ける六百番哥合に再三見ける
飼也麻火や蚊火也とて猶あまれ歟実
とるにも飼也とて有とこそとも飼
付とこそや黄也飼付くすひてあんや
後此の説は麻火也歟
とこ世棚此梅の花やてりふ吾大君の命もかよと

橘ハ常世の国ゟ来也故に花も物も
よわりいやでりと云垂仁（すいにん）と云ん云ゝ君の御
事を橘まゐらすへしまゐりし云ゝ此時の所
製にも橘乃こ此の橘のやう（やう）なる事也
有橘の諸兄大臣の家の紋の製也
十柄とも書ましん云ゝ八代とは八十代の
云つり是未詳ハ仙覚律師云
こゝ世子すむ限き此所太刀細工たりしもや世を
大の事ハ浦嶋の子のあつまりしと云こよへと云常
世あといつり太刀細工の事ハ讀りんたるれ

---

私云ゝ細工ハ橘のことも今の太刀のつく
見やと云ゝ是も仙覚云
我ハ（る）もやすゝ此えかくしもてなすとやすミとえたり（見えわ）
此哥ハ中臣と云女を人のまにつかうる
を諸人恋もあれと大臣一人えたると讀り
と云ゝ師説ハこの哥ハ我もやすミと見える
ことなりの正説やと云ゝ我なりと我なり
ゆゑ云ゝ我なりや家ハりや此つまを見と
おもまゝあやまりうきあやまりうる哉と
云つり源人の同くかきまてて〱これを

くとてこをあやまりとなりこそ見え
は侍りけれ此あやまりと云かゝる哀
なるべし山かゝる哀なる字の山是そらと
字とあやまるにや和字には其のあやま
りある也人まねをし文字をとりける
て云と云歌は俗まじりなるや和歌
なれつへよ文字をいふ事なりけると也文
字つかひを此事となるらへは此也人と云と

---

一和字之字仕事　続乃者とちかぬるを
　書く例見へし
をとこへし　をとこ山　をとこ山
むかしを　をとこ　をみなへしの枯
をく露　てふ詞之為字
尾之者　木かくれたかく山のうへなや
たかく山　おほろく　峯　たかし山
おとろく　たかきの葉　木の人乃ち　花乃ね
みたりに
えは枝　梅ヶえ　松ヶえ　たちえ　下つえ

こゝえ　たえ（絶）　きえ　そこえ　こえ（越）
見え　ゆきえて　かえての木　えやいはす
えのきぬ　えらしく　くぬ木（柏）　えんかく
負をへて　まへうしろ　こゝにれて　あへさま

へ

このへ　さるへ　へ問　こへ
おりへを　たへを（不堪）

ゑ

すゑ　植ゑて木　一ゑ（鞁）　こすゑ（梢）
ゑ（絵）　いゑ（家）　ゑのこ（犬子）　ゑいこう（永承）
ゑ（座擇）　ゑんのさほ（輕）　ゑんし（塩）

ひ

ひしひ　思ひ　そひすし　あひゆめ

あひこゝね　おひぬま　たいゝ（廿二大夫）　いさよひ（七月）
此字弁此等乃類皆通用之

ゐ

あゐ（藍）　いゐ（地井云）　つゐり　逆縁よりゐのまゝ

い

いゐ（飼）
あかいゝ（臺）　鏡のしつい（よ日文常ニ通用之）　てんかい
る寄此歌人乃良花而歌よ見えてゐてもかへこゝろねつきを
此良花此歌いつまゐ乃説をかへ同歌寄宣家て
に侍云只いまとなくつゐよ花とめ
ゐしつしとたかし家物にわれ七常寺
生乃花見

自見
かの三吉野迄よろけつゝ菊丸ほとゝきす杖か色の白さか
すゞ菊とは黄菊白菊と云へり或和菊と云也
俳諧の説ありしハすゝの菊や追すゝむさ海り
足しらぬ菊とも土クとさ杖ハ汝かさ杖也
色のてらさ照こしと云云

右此条ゝ誹家之記ゝ内或口伝或ハ自見
但之諸人今存知条ゝ不及注付也

三笠山春を青かくもみちや氷をたゝく雪の瀧　雅
鶯谷ハ名所也

梅乃花雪に三吉野と春の木ハ烟にそ花を見る　貞室

雪ならて咲春風ハこゝや吉野と春や淘るれ竜かりゝは
霞にも春の萩原ちらぬよそさすを那須野のさかりの秋の
山とハいはてすゝ野と読る跡有とへし
稲春氷　くすゝ人国栖人や　口能立はらむ哉

氷乃枕とハ
和歌のうまねの麻乃春風に誘れ枕ぞけやと云る麻
をこゑつゝも麻桔に縄を引て麻をひ初や
言葉ともれとも　稲碢に云へり草こゝめをと云
翁それ火とも　翁食する火云
萩乃葉すゝたより杖ふさハすゝの花の名と読り

鹿乃むら友とよむお鹿はおひてつれつゝと詠
まく我へてゆく也あるましとよめり
浪の上にかけはみえしつゝ舟こ形恒あるを
こゝにほれはこそほれなるみえしつゝ鹿や
よ井居そ　よあり居や
三年のすまゐてよめり　にく年のすまゐなるなと云
所乃淵瀬
おく霜むこむねはすらとかゝねはすらを云つり
ふすまゐてこそ詠れ（一本ノ）うきとこそ云つりかすかなる（ちきりしてつゝふ村のさとへ行歌）
るゝみえて見えけるひさしみ下風にすまてつとめ村雲の人　定家

夜影と詠　定家　秋の村雨ひつゝにとよみたる　定家
多川きつると詠見人いさと詠見人霧のかゝりと詠見人
もろこと詠見人　説云気こともすしと詠見人
世習と詠見人　おひさしと詠見人　心たおと
詠皆定家て云　又後来もよ萩
萩なと詠ふりしと詠見人　ひさたもむまと
詠なり　詠而り（おもむ）　鹿乃詠はなくとよめり
詠とともや　猪云や心のとるると讀り
ほしかゝるなと詠　ひさく花と詠（夕かの花に　詠も涙なを　詠り）
ありしたるくるる　り　たる木詠　古歌あし

ささめ詞 口のうち詞 只口のうちなる也
おとしめる詞（さけしむると世俗にいふなり） 幸居と詞
はりかけと詞 つりのさんしくするなりやい
くしーきと云んし せりしきと詞
いくたほりに詞 たわりあまさのするなり
たちろくと詞 こころみまとあれるなり
ふ思の孫稍と詞 不思議なりも覚え（いそまうする） おとろされ
付之詞 御別ならや にこり井丁
剰をとあるくてすゝえるかへる人々より
るて消せ井をいふたちう
かたらくと詞 源氏かりそめにみしあくるまて
いつりえのかたらくるなり
夕るゝせと詞 人のまと詞 こゝろはなくし
ふけこすと詞 夜のまうするなり
夜すかへと詞 夕ちの涙と詞 ちまり
ちりの衣ましをてとなりしなきとし
（しほ達）たふ衣や いきてゝと詞
すゝすと詞 すく達にゐると詞ことさま夜
うへてよあまそれを心日なりなり
おちふるゝあと詞 せり 人をとくさむると詞

人をもむかへなれ　とて　あはしと詠
るゝさゝ浪と詠　なかめと詠
袖ましつしよ月影と詠　破乃子之詠
海人乃子なくに落葉之詠　石見や
こりなく浪之詠　なかや　風も夕おもよし
之詠　夕なきぬるゝし　起くすうらん
そもそも之詠り　すらといふ乃すら也と云
同云やすく浪云　無数なる也
むつまじいむ川あかるや　人とうつしと詠
思俺今我身はつらきよ　哭と人はかくなる人　為世卿

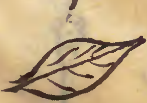
む川音之詠　口まねと詠
うききるひ人之詠　あるかね之詠　（見るねの なり）
雲乃をつま之詠　もゝ乃子之詠　かくさると詠
足空へ入て人をこひけま之詠　あかりく之詠
花吹もして　嵐之詠　すら之詠
こゝをおと浪云　水うき落や　乃れあそて之詠
乃風之見り也
と詠めていふん　なり
おこしあてゝ八下ちかひや　月をとて夕浪
下酒たなき之詠　とて　てあれよと　詠り

よた京まて出ことくり
はこみや又はんかれたさそひてむされらぬ出もすゞ　（雪）
むされしにおひえたところくんし語らし人
れ云や
人ゝまね後はむかしを夕暮ハ行くまでも井にされはうつ日
なかなか袖ふるけよのみけれとて思ひそむる涙なりけり何
人のうけ（かせ）と詠　世にこ（ぬ）れさすまひかぬを
りと詠　まつけと詠　名をかりをまと詠
人をうりまんと詠　名とけ後と詠
はとおりしおと詠　いとおりし　名はしおなみゝらと詠　（素純　句也）

んたうりと詠　夜の日よれと詠　日よれと思
日はとおなり　衣うすれてとい夜ふけて如覧
うすゝゝあうや
いゝさかり世はいつまて行は老しるね翁よ男なといふて　（清輔）
草も木も吹かれぬる秋風に嵯峨の笠ねる物思ひの花　（新拾）
よろほひうと詠　慈鎮哥　蝉の初秋と詠
水のあはれと詠
人を見は我身をみるもこの名無随仏し　（慈鎮）
年ふれる京りよこうに家まて如まししとけぬはと詞（のや）　（後拾）
きりしよきいりしきさと云や此哥れんに云れ

しま松と詠　草ならて海を稗叶て也や
山賤の住く君か我宿ならんせいさはるけると思ふ　佐れ
はくてこいとく也
雨ふりての梢の松と詠　日本國の菊の濱松と詠
もろこしもおなしや　菊ハ郡名や片山畑の
次庭の浦や浪またてるかれ松をひ枝を浪のたねりもすゑ
俊頼哥やらうまし松といふ生ひきたる
松ありし　ここ松と詠　常雲也
難波江の岸にそなれしはふ松と寄せし浅月の二浪

一 草

詞二乃一字を草とさへこ詠　草あるも読や
忘草説くあり一ハ萱（菅）草や　住吉岸の忘
草是也　一ハ新ての草や　ひともよ佐と詠
萱（菅）草ハ見の二草と云も菅草也　佐と
思草ハ忘草や　此和名説也　よるもさま
ひるもさ忘草云と
金露草と云を思草と云ふ下葉のこう黄に
色有つ稲の色は金露と云と忘草一説
あるや
葉平云

忘草萱草也云みちのくといふものゝ事也後もたのまんと
詠思ひ忘る似たる也さけなりと云
説もや草別の草中に此草ましは
なるかりしを見たるかりしおや昔よれは
説くのいは不及了
みち萩云蒲萩や　和名は鼠尾草と云り
山しといふ山にあるしのぶと云草や古今の説
思草といふ説く是一ツには紫蘭と　和名なりいは
忘おふこ書ツは事てしこ一ツには尾花也但
おほ花のかとの思草と云いふなん成りや師説

めはらんたしをは和字にはらんたしと定
梅のもの物をきす詠みは和字也思草
此一説月草云通具説
にも留まる此字を書此上にをまて読み皆
彭ノ乃文字を読や
ろきく　ろうい　ろく語　ろ舟
六通　ろくやうえ　ろすし論吾也
らいうし　らに蘭　菜と菊やらに蘭也
らちあみ　らうすかのあやなり
るきしのたま　るしけ云　るやしてん　具山

りうたんの花　りちのしらへ　律調
るり　瑠璃　るい　るてん　流轉
るらう　流浪
まうし　まうまい　語や　たゞ茂く候り
此等何も前代の人の説て漢字をも付候や
山椒といふは世俗にや上相子と云やうきうむの時山せう子
うへられ侍るや
志のぶ草とは篠ゆいある原の名を和する草や　葉
の篠に似しるとと云一説は二海にある草と云
ことるし草とはくうしの説るし　但此草中にあき
菜と云なとゝするし草と云一説も有や
於よ生ることゝするし草花蓮はれは水
草の名　又田のはとよこるきなると云やし
蓮は花をちらすを詠
立葉　浮葉なとを詠　ただのことは　たゝ月の
一名とたしたり　老とよりあ原とは藤紅く
なすの葉とゝふるし　漢云よ云蓮をむん物す
すると葉をすや　ならすれ也とならす
きの中の世界し
芋　白ミや　ゑひもなすけちやなすやまと草

あらさいや かうしろ草ハ白草と云
をしねとい 早稲や 鳥禾と云 黒稲や とミ草
と云 稲や 富草のこゝろとそあり
たらま池草 白ハよ草と云 かきつはたの一名也と云
菊ハまさり草と云ハ一乃名也
草ハ稲くさより生 卯よりと云り本説や
萱姫といふ 乙くさ萱と云 日本記ニハ草の生処
名とも云 乙や若萱の詠
小こ草と云ハ箱根山坂草の新芽ある事と詠り草
のこ海に花のし詠くこまかなるや詠つこ

草花詠
ふうミ草と云 かくれんのすゝき 昔草九云
あまのかり草とハ日本紀云稲のまへし
まるきをまうす御けのあらき云とと神代
の事也
言わし草 足輪ふまへてよなり
名る浜松と書 こゝる 小さとあり 女子のうき
にまろへよりうまみるりころ事と詠
草茎と云 あむまと云 あるもこるしこま むさしろ事
名草の妻と云 新妻をまへありし書と云

。す男とも女とも云や又書の也名とは
伊勢物語に見えたり
るかりては海草也世俗に和する草と云説ハ
和のるといふハ和のり（ゑ行）と云也
縄なりとは海草に縄乃ごとくなるをのりや
ぬるとは沼に有こまかなる乃ごとし
根ぬなハよぬなハ同物也
なきの有川おもと詩にを作しつれハ水草のつるの
事や菜の丸て蓮乃葉の如くさき二
とくなり花の白く咲くとこれもよや

あかけ草とハ説こ是一ッにハ稲草一ノ云
七月七日露のこほるいもの葉に小柿
かみ親を云一ッにハ水陰草とて水草や
とこと定家卿ハ秘万葉云水陰草こと
なにはの稲とハ稗作ハ穴五寸是名稲乃穂
此なるなり
ことミ草　民乃草葉　小井すミ　小井な
めことゝ云卿しろ来を食こてろや
八十三述翁　丕判

# 言塵集第四

木草竹田洲塩丘浪氷水井柵橋
沙石海瀬渕岸山七夕毎月名
朝夕夜暁年四季名國名夷道
屋垣柱門戸殿貝綿　木綿衣
斧鉏露雪霰雾雨嵐風星
月日天魚少ゝ神人内裏色影
次畏弊軗笛琴棹髪（鬢）襦箱
鏡柄弓矢轂老懸刀冠枕床夢
心守已上雖在題目無本

国立公文書館
National Archives of Japan

一槙　ゆつきの立枝とは詠りさ衣の袖ゆふ河
まきゆつきとは真木の事や古今のまきの
たまの木を同事と是は秘説や上にも
の杜木をは真木と云やよまの松山とも
（脇名也）松山の名とも槙には真木とかけり
也——とも

一松　深雲　源氏云　あるゝ磯松　岩根雲
そなれ松（生初しかき）　和田乃笠松　名木　松笠（也浜り）

一楢　あるゝ楢　ある川楢　あへ楢（阿信相）　青楢（和字二）
ならの川あへを詠あるやまりぬとも云

一柳　青柳之詠　垣柳　さし柳　くろ柳（糸柳と律とり）
青柳の糸よりかけて春雨をいつまで宿の鶯のまろ（いふ事）
柳雲とかなれ云也説あり

一花　あるゝ花　とこ花　ひこ花　かさ花とは風に咲
多くを云　風の花を云　なれ花とは見と云それは花
ありゝ次石り多きに生しと云
白花と万葉によめり　是は
さし花は花とかさなる花やら　次櫻は真
の花や　執るのかす　櫻を執（まれ）のかさの
花とは　師説云　白花白鳥とはたこう

ちらすは花なるべし云々

一梅　百本梅　梅林　曲の名にもあり

一紅葉に匂　紅葉を云り　色にてある云々

一本樹本　かゝる木薪へ。あさぢうき薪や

そだちたる木の生知を云　万葉に云本有

その外ら本万をと　ゝりたる云々

八雲の御説にも木羽ありと聞きと云　云

侍るにや

薪こる鎌倉山のこたる木をまつとながいはゞ恋つゝやあらん

市のよへきのこしるまでとよみやれども

同事木の老さびてよこたはりたる物に

こゝもしろく云や　川哉

一椎　枝椎　落椎　椎　椎葉

しふしゐ行山の椎がもとなる君がゝし夜すがら（らい）

源氏宇治の巻にも見え侍所の名や

草

一藻　日影のかつら　（まさきのかつら）ゆふまの葉かつら

さねかつら　（さるかつらを　はすかつり）

あふひかつら　甘つらや　たまかつら　いもかつら　（花かつら　日蔭に）

山かつら　又暁の雲をも云へり

一思草ハ　金露草之　順ヵ和名云ニハ　若菜なる也
我恋の今ハ色にや出なまし　軒の志のふも紅葉しにけり
此説前ハ紅葉せり　此ヵ忘草と云ハ紅葉と有也
或説云人をわするゝによる故ニ忘草
忘草偏ニ忍とも　私云紅葉する忍り
似たる草の形之事にて　岩なとに生た
る草也　なこまをもる説ニ云ヵ人なるへ
不ぬ師説君不審や

一忘草ハ或萱や或ハ葦やなと注せり　萱草也
住吉の岸の忘草治定や師説や

一菰ニハ花あり　流あり　菰根あり　角（まこも）
菰の針日菰つと云　菰の中のまこもし
ひえへあやめなるまこもなるとたとへ詠せり
あれ花綿

一やち草云ハ八千種と云り（此草之）草のつといふ草之（詩ニ云り　綾気ありと）
田草　あさ草　小升草（まし）　初草　日（ころ）
百草　和し草　おもひ草　荊草
寄草　御寄草

一稲　いなくきとい　稲の穂の名や　ゆか穂まへとも
たゝ稲をましや　川るねあくあまさき小田

と讀り名所也おしねは遅穂兼日
と云はたくてや秋かりやこきまや首をね
くと云なすは首を早くおほさんと云也
ねきおけしる也（てあまたたとへし）をみかあるたとへに云り
学文の人をは首またたとへしけれは首と云は
たゝしうは時れまい

一松
三吹松山を　高松の浦をあ　志賀の濱
かとまつまつり　るまゝ松名所聖この四
松をまちとまきと云一流也あいするの夏とあり
百枝雲　非紙は流

まちまき前こゝ西丸也ろの木とあひのりとなまきと云
松やとは舞のみちへやはるるや

一梢は下吹風のかくりしは筑波山と詠かくりしを
とはかくりしよそ云也云や

一木　こゝろれ木　うるまき木　里木　家作有
かる木　ち木　社有　ふミ木　すゝのこおや
つミ木　なとり木　蕾生とあり　まこるりを
ひかるりぬとよるは　木乃すや

一梅つゝ乃花とい　唐木花と云り　清少納言枕草子に云
春夏秋冬に花の咲ミと葉をも見風をまえぬ

ま似たり

一同草子云柳のまゆハひろこりあハふりとあり

一みるしこ草云 白薇とあり 和名云

一ゐのこ云 莎（コウ）草や 又薇銜とく

一かまつか云 剪（イヌタテ）草と云 又馬（ハ）藺（リン）と云

一思草云ハ 恒衣と云 又莚ともかく

一篁竹云 筭竹と云

一節（よ）ハ竹と讀り 竹の名とく

一むろの木ハ川柳とも云 又檉（ニイ）（ムロノ木）と云

一赤き柳とて 山柳や

一川柳ハ木柳とあり垣字のみ（川字なり墻なりきかし）

一まゆてしこと云ハ 薗芋と云や

一そのまゆミと云ハ 杜仲とかけり

一ひきかさ云ハ 格とあり

一ひこえ云ハ 薜子と云 一字や

一うつほあ云ハ 東天法とあや

一右是皆建斎の草注之和名抄書

一源氏の字治の巻云 むつしけ有きれの内なとと云

たか名和りハあよすたく竹推る

一河原蓬ハ連歌にハ不嫌きらう　蓬莢と云や万十
六有之世俗に朝つるま草のすや
一ゑひつゝとハ紫葛や
一おほつゝら防己に書と云字有とある
しあふましき乎
一皂莢（サイカチ）　葛莢
一日本記に五叱之とも云ふハ又こくみすや
一ぬるてとハ尊はつ字や保草ハ三月より七八月（との事也）
一くちなしとハ梔子とあり
一山柿とハ鹿柿とあり山の字なし

一おはなとハ晩稲や　白毛稲　内粉とも
一うるしねとハ粳米と書り
一瓜　青瓜　白瓜　まくハ瓜　ひさこ　熟瓜と
冬瓜ハかもうり　烏うり
一うきゝ木槎付一字や　是木皆和名説や
一田　坂名不　種田　悪田　薪に云ての田　神田
初田　深山田　沼田　藻田　蓋原田
至田　潟田　独田　長田　前と振り
水田　小升とかとい　青田や　田ヱと云　田舟や
こと代（ころ）とい　非田や　こゝみとかとも田主也

田をうへてたねをまさの作るを云也
田子と云田うへ女や石田漆田御田まな田
あら田あまれ名田と云うきれ木乃
苗乃山田のまゝ

一土

あらなや（此の名し）ゑふね黄土や（まみと云）
肉土やえふつちと云ひちと云泥や
あたまきを以るをひさむと云おを土ね
土や又し土と云　水泥有り

一洲

白洲中洲川洲濱洲浮洲流洲
長洲真洲

---

一塩

たしかにと云ひしかに入塩朝塩夕塩
真清塩とちと云まさしかげ塩高塩
しほ塩さい塩とも云塩まと云潮干を
なよ塩や塩焼と云焼まハあまり塩盛
本いきの焼まで似よらぬ焼塩焼塩の名
稀又なこゑや塩のうねりや塩うひと云
塩干と云塩見と云一説あり兆師説や
塩と叶ぬと云塩時にもよくかなひたるなるべし

一浪

明石のと浪ありき浪真は青波ゑ川は立り
濱浪（立ちきあらきあらき）八重波

あとへ波　あとの波を云　江乃波や　いかへ波に
五百重（いほへ）波や　千え波　かへり波　八重波
いさゝ波（只さゝなみ也）う波　三重庭にはおきつ
白波　嫁乃波（波の雲　烟の如くなし）山下とゝろくは波と詠り
黄波　をころと云　北の濱　當波　千年一度立
と云や　志きなみを云けく云や　高きと云男
波とも云　ひとてと云　女波とも云　ひは　瀬波
さら波　白波　よみよ詠り

一　氷

うすらひ（薄氷也）　たるひ　うす氷　冬の（霜氷　霜乃）
（こほり　こほりや）むね氷　氷のくさひ云　氷とそらる
と云や　氷の山と云　人のたかうりしるたとへ也
年々や　氷の使とは　ひむろの使や
ひつかさ（是はひのおかみ云事也）三年つひと云　ひのもと
おはおろしる歌や

一　水

春の水云　春なしるみや　影のむ水
さゝま水云（さゝまのゝへは　あさしあけ也）　若水（元日の水也）
むら水（泉水也）　いとみ新水也　ます水と云（清水也）
心の水は一説は瀧や　一説は心とみまた人の
悪水は瀧や　ふこりみ埋み　不来み（天水也）
限て絶と云や　清水　庭たつみと云　雨水

たまりしる水や　忘水とかある水也
岩つたふ水と云（石よりさくる也）
山井清水と万葉に詠　みけ水と云　清水
東国にあり　汲とも通ひ（まろし）　私云範政云清
香の浪は人のいりいて汲ともよめる也本（氏）
まろ人の水（神事）　雪消の水は雪とくる也
たらいの水（わり）　あひにつかふ　氷水（涼み也）
垂水
一井
玉の井（名所也）　板井（名所）　さくらし井（名所）
走井（名所名）　寺井　あかの井（閼伽）　たる井（走井也）

---

深井　石井　岩井　山井（吉野也）
桜井（名所）　いさら井　筒井　亀井（名所）
古井（忘れたる井）　三芳井（とよら井寺）
稲井　あすか井（名所）　井筒　井はらい
井　ゐる云（まて、）堤の（ゐせき）
一柵　井でゐ忘らるゝ　水の流られるゝ　浪のしからみ
袖のしからみ（涙川にしかり）　人め志からみといへり
かけろふや　雲のしからみ　風のしからみ
山川に風のかけたるしからみは流れもあへぬ木の葉なりけり
一橋　棚橋　一橋　丸橋（丸木橋）　竹橋　中橋

舟橋（すかすかに詠あり） 槫橋（よ詠あり） ひろ葉橋
小橋 継橋 鵲河橋（鵲の羽を並ぶなり）
埴橋 小絶橋 名所 長橋 御階 縄橋
二緒橋 名所 玉橋 打橋（詠） 此二ハ七夕也
長階 内裏也 此外名所橋多し

一 沙

みさこ和歌や 私云 かくはまさごを身にして 香薫同 [illegible]
いさこ 白すなご まさご まさごとも云（まさ 同）
はまさご まさごの真砂と注すれども又 [illegible] あるは [illegible]
なるさ 一説富士山と云 若 [illegible] とも
[illegible] 雲の中より [illegible]

一 石

此前ハ寄沙のまさごの文字を云略之
玉柏と云 石の名也 岩戸柏 日
天の海石と云 海石也 さゞれ石 名所 真白石と
さゞれ石 庭の立（石なり） 玉石 立石 庭にあり
石枕とかことゝいふ名を称すや
渕なとこ石は 岩根也 つま石といふつゝそ
三浦く石と云 あまかされあらいまで 尺ある
石のうやくう 石とちいさき石の名こ
石たゝみ 石ふるとも いさゝ石 石のまひ日見
石舟（千引の石）日ゝし

一　海

まけみると云　肴なりと是たゞよ播たる

こそやまつけみるやまけるかいとを

池なとあれはかの須道やこゝの川

一　瀬

はやりせ　くらせ　早瀬と云　底瀬と云

かはせを　恋をつき　ひと川を　後瀬

（鞍川まで詠せめ瀬のうりや）塩瀬　せ枕　瀬浪　せ絶

百せ　八十瀬　瀬切と云（まことの名は文字は）（とるると云事）

たまつ瀬　亂りあるすたゝるせや

瀬ゝと云　莫敷時の事也成や

一　渕

岩渕　岩墻渕（日かへ）片渕　青渕（万葉云）

青色渕（名所）　かしこ渕（名所）　るへの渕（名所）

莫ハ渕またたこかたと云へり　實と渕ニなる也

いつり　此外名所多し

一　岸

両岸もろきしと云　高岸や片岸　片岸

此外名所多し

一　江

ことひ江　海水をあるゝ　小こり江

こもりは　古江　さゞれ江（と海を江や）

江川　此外名所多し

一　湖

こゝ鳴と云　湖の名所　にほてる日

志ほてる塩ならぬ海　塩するならぬ海（名所割にあり）

一川　名しらぬ河の名や　河をろしハいねや
川すゞミ涼　川狩　川舟　ほとり具ハ
何詠　玉水ハ　うちとハ河内や　たに川
うらちとも云　古歌詠之　白川
夕川　共を夕川やうりを詠　白河（此名所ハの渡し）
ひ留川ハ　夜川　みな川　河戸
川添　川つら　川そひ　閑河　川ぞこ
真木をハよめり
さゝ浪よせてなれ　卯花川に手をなし浪のなきハ也
渡ル川すそをよめり

一海　江河海　わたつミ　うな原　わたの原
わたの底　あまのかハ　志ほて　難
おしてる　よろつよと海詠
まへ名や云つり　船なきゆふなきを
とハ海をよまず　私云文字の人々
船なきハ其や　夕なきの夜や云
もなきと云まし

一原　柳原　柞原　椎原　ひの木原と云へや
桑原　園原　竹原　木原　萩原
芽原　つゝまき原まさや　小原　小はらや

かり原　焼原　焼生（やけふ）　いつ原　一の宮や
芝原（たのめの　流之）　志りの原　名木　志のふ原
（日本ニ）　針原ニ　萩原ニ　椎原
石原

一野
広野　くさ野とも　冬野や　深野
浅茅野　たて野　又ハ稲野や（とアしろ　野もあり）
しのし野とい　夏の名ニと　ふセや云野やと
一説　あら野

一林
右海かくと林の茂けき後云ふまかれハなし始
めて詠　羽林　中ハかわの君名や　梅井月の林

一坂
あつまれ坂　坂本や　小坂　由坂　稲荷や

一谷
いはほこい谷や　谷ふところ　桜谷　すゝい
すゝ吉水　山口や　霞谷　木谷

一峯
あゆうきとい　峯の名や　なるたけ（嶽）
高根とをり（ニなく）

一山
西山（秋冬）　山まつり（秋まつり　秋也）　名山（出とも云　名所にも）　根山（名木）
野山とい　本名山や　しけ山（名所有　たにとも云）
かくれ山とい　一方ハ深一方ハ野山や
しえ山（山とも云）ひろの　富士（又ハ云つり）　柴乃葉山
山乃こかけとい　常陰や　いつをかりなや

ふミヽ峯山と云事もあれしかるへしや
山所は三句所嫌や
峯高山なとつゝきて立る花羽高は麓をあらそつか
嵩上くのくし山の躰也とらハ云やと一説也
此二川は此係りし叶連也ての雲の内枝
三下皆山所嫌ふしかるへく嵩なりんと云ゝ
むまと云山の異名云ゝ日本記云下り猿の
はさ峯ほとむまと云や

一　七夕　さかよ舟　紙舟ハ七夕の舟や
（万も）おちつものとゝしめひを天川の渡りすきて

一　年に二度あふね　渡る也　あまたりと
よめる万葉にはあまつちをあはて是書
玉橋　棚橋　打橋　たとへの事なら（きてと添もり）
さか舟　岩舟　皆天川（なり）（まかり）
二星　鵲のまよ　夕志保　露　如意る
かさゝきなとによる　銀河清明云
七夕の多ると云　題にてかさゝきのかゝ所
流をもよ　皆思ひてまいれ
（万）久方のあまのかはらとてこそみすしは渡よとゝさし歌代の限（限ー）
天川は只乃時はある事をせやひみすし川云ゝ

天川星の河原ハ伊勢太神宮のかたに有る
結びし　不苦
乃七夕の袖つらねし曉ハ川きれ雲をたちきらんも
袖洩くとは雨涙やつゝハ袖續や一には袖付や
不逢川のあさせんや逢しの妻とは織女
名や七夕の年乃恋こと詠としことの
言乃なの

一 毎月名
正月 むつき月とも　二月 きさらぎ 衣更着（きさらぎ）月とも
三月 やよひ 弥生月とも　四月 卯月 卯花月
五月 さつき 早苗月とも　六月 みな月 風待月とも
七月 ふみ月 文月とも　八月 初来る 初葉月とも
九月 なか月 長夜月とも　十月 神去月 神楽月とも
十一月 霜月 霜降月　十二月 師走月とも
和哥ノ和学指説花や

一 絹 あさぎぬ　絹衣　絹ともひ云 絹袋すゞし
絹ともひきと詠てもくし鄭りもひとき
人（迄）ともしきなとよそてゐるや下着あかしい
絹のりうきぬ云つり 絹訓 絹たきぬ 絹笠
絹石 絹ひうきそ 絹開や 絹さかも

朝曇　あさ氷　あさ川　浅とき　旦と云ふ
つとよめり　つとめてと云　日中や　あさ餉
こそ早旦や　あひこそ　朝日や

一　夕　夕暮ハ朝夕日暮　夕まくれとも　早かれ
秋や　雲のはてとよはる雲　是
末をいふ　夕のかや　よそなる雲とハあらくの
うなる心をや　此雲いろかいとる　夫頃の日
るる月明ヶ日照おそくちりて又を
急なる雲の細きに外や　くらひこ
とき夕の名や　たそかれ時　又ハ暮陰　夕ぐれ
夕霊とハ夕つくゆふ　むかしむかう夕と云
夕つけてと云　夕ばかり　夕居　万葉
又ハ秋ての夕と詠り

一　夜
むは玉　ぬは玉　ぬ玉　是等皆夜なる也
夜比　夜よて　只夜半や　さよとハ五音夜也
三ヶ夜　夜と夜すから　夜すから　夜寝　夜人
万葉にハ夜さよの夜と詠を夜すから也
夜もすからと云　寝　夜の中なるや　夜目
夜床　夜桜と云　初夜や　夜ゐと云　旅寝
あり夜　後とハ指に過る夜をいふなり

我世には出てしかとも太刀の緒をはらさかけ相住

一暁　しのゝめ（篠目）　有明（後晨）　鶏　祢覚　鳥鳴　東明山の方

あかつきハこれ時　是等皆暁のこと也

ゆふつけとさへ暁や

木のまゝと出鳥うけとこ世の上の横はしきとつけ

三條天皇といふをつゞけりと云やむかしけとい

暁の名也　一説いはれひろこには暁の名とはと

いふの日いふの方の時と云り

あけ星　明星也　是皆暁や

一年　若やあの文字　孫年やこ文字はやもとふ二なや

---

年とさいるとは年構や若や年さへるとは

孫年のさかるし玉年の緒年のと　つなかれ

年せなり　うしやるをいへり

むまれて若年の緒よ加よけり其子や為をあへとする（ありし留めありしとい得あし）

老ぬれハ文をあいむとは年よ経の玉を手つなれ

年の若きハ玉をもち名を若き績り

一春の名　霞しく　あさとり　此ハ春の名也

一夏の名　たかうひく　うけろふけろなと申せ夏にも云　（つりけるの事申す春の名と）　（派ハ夏也）

一冬の名　三冬　二首歌

三冬つきまじきぬまやと詠ハ冬績春来之詠也

冬の盛みハあらす

一國名（雲の葉を渡くとは伊予にありけると仙覚／に松の葉と食まるゝや）万葉には地の字を国とよめり
一日本名　三にしわの國　浦安の国　しほこのちたるの国
秋津国　右根国　葦原の中津国
神武天皇勅には日本国はうちなしと云
虫の来り向くゐよる聡やとぞ秋津
さん天乃羽とぞ秋はえの袖と読るや
うすき袖と云心なり
そらみつやまとの国はおしなべて我こそをらめ
つけなへて我こそませ　我こそはつげめ
家をも名をも　是は雄略天皇の御哥とぞ
地りまで愛てりミつ大和國とは昔神武天皇
の御代の石舟に乗て天そらの國を
天空御覧し射空を飛りけり覧して
とうちより三川大和とぞ　万葉集の哥に
一弥陀の三國とは　極楽や　涼しき道をぞ云つり
一よミつの路とは　黄泉や　あさく地獄や
一九泉とは　冥途や　三川を川わたり川
しほひの山　しての山なとを　いへり
一えみし人とは　卒（ワツ）人とぞ云や　是は住しと申侍

日本をば浮ぶ島ともしまといへりと云へり
一 よもの海をば世界なるべし
一 胡國とは帝尺と云々 一 高麗国とは三韓と云也
一 新羅をばこうらいと云や 一 百済をばくだらと云
一 唐をばもろこしと云 から國大一人の國をば他国と云や（唐土なし）
一 あしはらの国をば西海なる國や貢調国や
をしなたとも云へり
一 八嶋国 安国とも云（日本也） 一 家國とは生国や
一 ひの國をば肥前や肥後や
一 うとまれ国をば隣国なり

一 夷とはひなも田舎やいなしま（稲妻）ともいなか
こゝろとも云 さてかすかなる国と添あまよ
さるならひなの長路と添てすへ土をはなかへ
乗りさか井て是か有さる田舎
とよまるゝなり

一 道 雲井路 市路 影ふむ道 柄のかけふむ道（とよまり）
井ての中路 三井路名あり 石の中路 大津路
さか路名あり とよてつた路名あり
新田路名あり 紀の路 紀伊路 伊賀路
出雲路 大和路 是は国の名なり 須磨路

やまとうたはゝみをよりて 屋ノ上ノ戸
語也又ノ語也 越前 越中 越後
とゝや 備前語 備中語（冬ハ） 丹波語
甲斐路 丹波とへだて ゝいて後々の志
とお番匠の芝や 手きのころのこをとて（清り）

一 屋

西川まや さて屋 恵や（見すし） 松屋 とく京屋や
田ちや 茶や 硯屋 猿屋 布ちや（小家や）
書や 畳屋 木屋 平屋 土屋 香屋で
うたや 史たま屋（排の家ゟも云つり）（陸士るとも名）
小升屋 行屋 通ッ屋（探） 忠屋（ちのはる新をつり）

すゝ立しや 雅屋 ひひな（晋 銅屋や）
あしれこゑや とちや うゑや 瓶とは越り
むつ家気 つゝまや 書向の家く 西川まや
たゝ株を西方まるし 会ら家之ある
りけをて二方まてし 会ららるを
ここかて一関のあるきき（川口まつり）なあるの垣

一 垣

杉まハ 重ノ垣 まゝき垣 菊垣
竹垣（楼月） ひち垣（ひうきの）（手や） ひかろま（やもと） 一説ニ柴垣
ひをろきハ説こ有 ひまを神矣ままあ
御幣 あらゝきハ 伴格社まて云つり 縄垣

一柱

急垣といふ井をかこみてしるや志うき（籬垣や）

内をうき まこと〻所垣

御柱（天立り）二柱とは二神と云 九柱

九本柱 亀の柱 之言（かさねしられ）柱 とも

うつれ柱（ある義）ちまき柱 九柱や国の

柱とは国主の御事や 霧柱 霧竹

これうしろや 竹の柱 真の柱 是非の

柱本の（後付）（九柱や） まき柱（すゝきもかり） あふの所柱

とはゞきなまの二神の文字 はし柱の

なみを（といかり） ら数のおわく花のあかや

---

一室

岩下室 内すみの室名所 松との室（方ッ方室）

ねも人の室

一門

（三ッ）三か孫の門 （帯）已こ河所門（君の御門）（手）三河の門

竹乃門 うき世の門（たとへかゝるとき） 老若（不老門也）

山の門 山の所門とい 清星の手 淳氏ま

朱雀往とかゝま 室門とい 道中まうる

引しうい門なりや

一戸

民の戸 民の家 草の戸 行戸 妻戸

門をたくすとは 文そこの人の乱是

ありおり 柱 封戸とい 妻戸の 不知あまき

有坂云や人の云なる也　萩の戸
黒戸　式二間　内裏にアリ　戸くりとも張也
いたひ戸　杉戸　妻戸

一　扇
平扇（ひらあふき）　舞扇　多ヶ扇　楼閣や
たかきやにのほりて見れは煙立民のかまとはにきはひにけり
これ扇一首ある様に登ての御製とて扇に有
鬼扇名所　本丸扇　朱　玉扇　老人をたすくる也
式扇　催馬楽のみなや

一　貝
薩貝　鳥貝　簾貝　錦貝　やくらみなし
江貝　白貝　桜貝　梅の花貝
から貝　河も貝　貝合の前には後拾遺
臣あり上人　など多く詠前てあかや

一　錦
二両錦　高麗錦ありさや　小車の錦有
錦の文や　闇（クラキ）錦云　つきの丘の　あり（きと）
云たとへや　山姫の錦　おもする

一　木綿云　ゆふの事や　御（玉結）ゆふ云　まき結に
てさゝる　ゆふにて神ともてさゝくると云事皆
結の事や　一きしの麻衣と云も古結の事也

一　いさひ　杉の　いぬすき云　斧加造の具也
祖斎　祝鎚

一 煙　かやりけふ畑のなし　室乃八嶋那の煙や

いつく煙もミつり

一 霜　あられ霜　斑またらし　夕こりミい　霜の秋

たれおや　とくれ霜とそふかうちりミけ霜（霜と消す）

霜結　霜夜まひいくとミこ　霜くもりミー

大霜の綱くるとミこ　霜くれまとせ

霜柱の柊や　霜折ミて云ふる霜大霜也

青霜　下葉まて　秋の霜ハ　胡の名し

一 露　草の月露ミへ葉本ミをミ（以ミ置ける のちるミり）

露ハ十ぬおやミて　秋萩をつくく月

夜露霜乃降らんむ是ミ露なりや

露ハ夕な結て朝ニ消とミをもけむとミ

霜の名や露霜乃とまてつらミハ後撰

に詠せり

一 雪

かいひら雪　大雪　主積りぬ雪

ミいりミハ木の雪乃落しつれや積れ

落雪や　淡雪や　雪のきけとも伝

多山雪ミハ豊後國中山ニ詠名有也

たゝまミ雪ハしけ雪や

万
一 家宮のすりの花ハ声ミしミそれのいすらおりもり

一霞

二重ハ雪路を二重と云つり　雪膚　李花
の菊やかとろくする雪とハ色くといつり
三重と詠り　三たれとハ雪霞両文字
おもと云や　むきる霞と詠　九重とて
霞と読りたり一句といとり一句や

一雲

平雲　山雲　あま雲（天）　村雲　天津雲
なお三重るとハ（ゆけり）　雲名し　冬つりおとさ云雲を
行きてゆ上へまでまれと　あ所れさ雲（昌琢）
くさゝるゝ雲かなく　嵐の山の雲ハまま一句
帯とさつりたるひく雲雲ハ病也歌（雲）

一七夕追加　七夕ハたなはた也　織女（タナバタツメ）と云り　天と云
字ハたなとはかり　たなくもりたる雲
あひおもをまちかれを路天とたなと云
とかくをりと云しなをかりゆへ云五
あるとき　万葉の詞や

織女の言手をて下そて　天河打橋やす渡らんたな一
あなたる一はし橋いそゆくわか身もしも妻と云と詠
是ハなりとも

一あ妹あり　あらと　背書丹氏のいくさまかちよる行
若云けをかりと定家に詠や　書丹ハ人の性

一 三てくゝと（郭公）　すゝむしわかく　水鶏その　ちゝよといひ
とあそぶ　梅とはるきく　なりける　声かこと
あさま　法人まつく　若聲つと　へすゝこゑ（聲は）
へすゝとい　へわりしまゝや
あつまあそび畑のなとは不見そがりこゆまて月かたふきぬ　聲也
ほつき聲は若聲よ　あさき聲と云聲やし　若騎聲と云

一 雨こ陽（時雨）
雨とは小雨や　春雨とは（五月雨）すゝめは夜雨は夜のある
さしとゝいへりならぬ村雨とゝ云のこへりもるし
ひぢ笠雨とは俄雨や　よこさまに降る
卯花くたしとは月雨し　夕雨　秋雨まで
よこ時雨　あめのつれ　あめの中　雨うさとも雨
ゆとたえまや　あめのまつると　あまもり　あめの
陰たり　笠やどり　月すゝし　あめのつゝみは袖まで
あまつれとは　あまもりそて云や　雨夜

一 嵐
東嵐　朝嵐　夕嵐　山嵐　野風　川風
春言に嵐と云は秋に吹と云り　且（春は不吹也）
古今に海の嵐とは雖然後撰に詠ぬ
大海に嵐なふきそとまりたる舟もとむるまて
（古今五）後撰云吹からに秋の草木のしをるれはむへ山
風を山嵐といへる也　此詠は字を為文詠也

## 一 風

嵐風をきらふれハありといへハ雲にも武蔵斎
道理とミえ海も嵐風もありけるを哭義前
合すへし
非風説ニ有之 一説ニハ作暗て限ると一説
神のふきと非風とミえ 一作暗に上瀬中
瀬下潮ありの上潮（ノホリ）や しほ潮に不て起るといふ
兵風 浪風ともあるにふまけの忌たる子
風の吹やうと浪と風とまたハ吹 動風
潟風 苦風 横（黄ナリ）風 南風（南吹とて云り）
おのかね（南ゆきよりは）小風 時津風見え 南風には

雪消と云たるを風といはすと雅（ねんして）の云や
ありける風さしほ風さしてまてさし（吹おろしにも）漆風 家風
冬風 雨こらふ 吹ぬといいぬゐ風や
ひかる吹といひつき（のはし）て夏は ふと海神ける
すかれ風を あかつきのやといはれ 東風の小ち
あまる風といはるゝ いかさを名あし 木枯を
秋の風や大風し 山こし風の名あし 海こし風の名あし
野分（九月中のあらし） 深秋にハ 哀なる風やと云すこし吹れ（つりと云つり大風や）
ま風とある外とまて 吹てすゝや すゝろ
もを 枝ま風たのしとよ吹 鳴るひくと風とも

あらし 鳴風（日本紀ニ有） 川おろし 汐風（さゝなみけ）
神風 龍田風 玉風（是亦名所也）
浪下 山下 小こち 荻風 心あひの風とも
万あゆの風を今はあゆと云て云る
当流て為ちゝ かさまつりと云 風吹事と云 一
川ぎりや 風の詞にも 夜風
志なと風 路さら桜の花咲は散ゆ 風の詞はすきものなる（待れ）
此社祭時は風こそ風はあらね
かさつゝ こゝろをねんじ ましまさあらすと
云つ かさまつり 雨かざさけ かさ之れ

---

世俗云ふあらし 雨風大ふりするとも云
云や 是もまた晴風のかくし

一星
星林 星のやとり 天津星 あかほし（明星也）
夕つゝ 七夕星 年星（諸寺の云也） よはひ星
（流星を云星也） 小粒ほし 星月夜

一月
天照月 月人（姮娥） 月人男 桂男（さゝの男）
月よみ男 桂花 楠のむかく 月 下弦月
立待月 居待月 寝待月 臥待月
ねまちの月（なり） 月の出 かたさえん月
有明月 あかつき十日とも いさよひの月（十六夜の月也）

不知夜歴とよめり　三月いさよふとも云

光年はゐなくてかへりぬねさ

（いさ哉）不知哉とも云　苦しきを云ずして　いさよふ月　緒都の（仲正）

入らくれまなくる月とぞいはれる月のみち

みさを月と称塗けや定ぬ　月と細し

さうしとよめり　もらさる朝月とよめり（まなこ）

ねすの月のうへ三回引云月の之や

寿日をや夜ハ落走明の月人の推し

浦ヶ月の都とも　月よや言をを云つり

月をさいふ月のまうきと云ふり月まらい

長月をかこよふ三十日をの秋月也

望月とも万葉にもあり　万葉にも云へり

はしまうへり　細と云まし　来るや

有明きちの月　有月在山かて云事不知（也）

暁露とも万葉に鶏鳴露とも云たる也

大暁露とのそ云云也

---

一日

朝日とも日や暮秋日や　二つ照とも昆也

河洲方常とも照して称ゝうら日とす

云ゝ内裏に文字を此高く彦とも不知

内より日秋のとぞ云日の鳥とも云

日の名あるゝ夕附日や夕附てひいた
ねを附てひむかへつけ櫛とよめるね
の月を日のなやねりとねの月を
むよふと詠りつけたりとすましるもひゐ
はさくらにむらひゐ新出にかう云るゝ遊ハし
雪は悟たし勢に伝し和月連不てゐ道にも

一 天
象道芸や天の字のことも後我法し
天は天の天のはしてへ天の天あし足との
にさをよ巣しいさるもおふく此は法り

一 巣
やうねを見もか巣と云さら月か巣や

田みキノサイトニ云いさこか巣へ石の巣や
堂のたのとれさゝゑもくてへとすゝとしねをかとて堂つ

一 鮒
かた田の名物藻臥束鮒といふをふかし
ある一束斗りの長さや
勅ある題もかくし堅田鮒につき煌ある中の玉章
文武の姫君文王へ衣服まてまいらせし
るかしや
古いにしへかくし堅田辺につゞきなる中のむつき
文武天皇の御時鮒につき焼と云物まゐらせ
りて少々をへらしたるよし大伴王子の御時や

国立公文書館
National Archives of Japan

一 鰡（なよし）（いなと）世俗に名吉と云魚也　伊勢鰹と云
ちくらまくらるとこと云や　日本紀云未考也
此鰯汁とのをたうし魚とを

一 鯉 うけつて鯛つりねてを万葉によまり

一 鯵 あかめはむまさか入口

一 鯨 くしろがねあふも比はとよめり生江の濱
あるは次書は也　鯨一頭と云ならるちるあそ
此卿とよめり　くらゝと云ふ文字とはさまあそ
とも云　字の歌とよみてあやまりてくらゝ
之ますにこゝれゆとほうゑの

---

一 せハお　ちひさきつとやさいはまりや

一 鰶 ハろかやさとハ著む姫の加えらしやと異
けりかきたり

一 神 神のこさかとそ神の此さるたや神のみおや
此業し国は神と云比類や猿子の神とそ
い胴の神や神なるを神なし神のあり
伊勢数をとなし　秋津神と云君なよえつと
流やや　餞は神嶋神と云やまけもらぬ神
かる神代云家のゆのうやや　宅神や
おほくんち山をと造し　神みかし

ち
おほなんちすくなひこなの[illegible]此山に三輪をあめあまる

日本紀云此[illegible]神[illegible]れ天め[illegible]所子

とこそすくなきみちもなきやあまつや

神（其日神神すく）（あまてらすおほん神ト）ちから神と語神代やヽと

葦（神を）日おやあま神（日神）（まし）あまてらすおほ神

と人の中をたつる照神玉姫と（云ふ也）（なる）

（神と）語姫と語るみとこそ玉より姫

豊玉姫此二神おや兄弟とこそたつ姫と見

そのかたおほを龍女く東にあるを

あけぬとこそ山ひこあまひこむひこ

是三日男いまひらとく事まつめ女神女と（こ）

（こ田のなし）たまりひこ日本紀云たきひこ此云天照太神

（のはなさくやひめの事をつまとしてすみ）（神と仰けるとて）

ちゝ山姫一柱神し　為王の姫は水神なり

木の花さくや（姫）所子や　木こうすま姫ゝてなれ

所神とい見せまひとも見れ（姫）

て見ゝ生まれ此花の語姫し此海の

神と為し　あまてらす大日孁貴神

名くるけひむとて日ゝ生まれ所子の（命ひこ）命手

神と仰ゝりなし　なるかきらけの神い日此花の

## 一　人

常の哥なれハしらて上つよの哥は内典の
此夜の哥と詠しや井乞乃うたとて升の本
みちのゆや吾聖まてとて人のとの詠
とも本中國乃人の哥やとて たら
わか乃哥衣とこらてぬつ哥や
三世の哥とハ内哥のみなし
くはしくハ天照太神よりはしまる神道
わか國ハ神代の始より
いるおさる人（輪組）と上古御たる百姓とも
わか人口法ことりの村わか人のみなし

かすくらき洲路や ひさくらき書道や 川あさき
みやこし身わき身至とも云 門のあき
論乃あさき 杣人 山たちとも云 山なる 壁なる
野人とも 猟師 山かつ人とも 宿なる
御ことなるとも 國司なり すゑりなるや
清田具 聖の内部とも 又は此すゝりきれ
同代より家治の文は 聖乃文と云なり
公卿をハ雲と上の道と云也 三位をも
松乃位と云や 朱雀院を山の御門と
下記主とも 木かんの枝 枝の花 け花

竹園 唐の池是も皆親王の御名也
國母ハ帝のおほきさきを云り后をハ云へ
ハ子とも秋宮とも后をハいふなりよ
丹墀庭ハ内裏の事なり帝王をハ
黒ミかとゝも大君ともつゝとも女帝をと
又おへ當代をもつとも云 眼り
須也

一内裏 雲井 大宮 蓬洞 大内山 紫宸庭
宮の庭 九重 是も皆内裏のこと也

一色 ゆるし色 聴色（ゆるしいろ） 紅と紫とを許云へり 皆擬也

---

深色 うつし色紅也 ますほ色 唐紅 梅色

一影 人影 草かけ 月影 三日影 朝影
花陰 木陰 卯花陰 鴫陰 岩かけ
岸かけ 水かけ 雨かけ 島かけ 杉かけ

一火 打火 埋火 庭火 すくも火 まとも火
とくろ火 切火 のけ火 まとも火 ほ火
いさり火 ふんけ火 なとせり 野火
炭火 かま火 花火

一褁（ツト つとも） 道行つと 山路つと 浜つと 家つと
故郷つと 宮つと 都つと 世の中つと 法の世の

一幣（にきてノ）ゆふとはあさ又木綿や　白ゆふとて
春にてくゆふしてとは　たてぬきゆふ也
榊の枝に垂るゝと添り　ゆふ乃事也

一棹　椎棹とは　椎の木にて作るや　子棹　舟のさしさほ（さほさす　けふ）
こる事也　棹とは舟をさす事也　さほされ　舟ニ法也
みるめかけとは　河衣かへるさありと云事也
さおハ雪も流るとて　山まか於のさすもよ
是や　落り在

一浮ミて置きてとは　何事の外の事を
いはゆるてこ政とて　右ても時々かへ
すゑつゝこととは　時のてうしやうちかる頃とを
うちれうもとをむ云し　所のてうと

一笛　かうてうとは　一調子のねとも　定家に
笙頭とハ千種勢　蘆枕ハ曲の名也
と簫　かわ笛とハいくさの時笛也　に吹也
六孔笛　浮夜ノ　秋にかゝるね虫のまね
云也　みそりの作　木也

一琴　あつま琴　和琴の事也　嬬の事ハ正也
香のたくへ　くもゐの事を　蟬形　かとも云
中の緒は是より　琴にも云り

一鬘（カツラ）

山かつら　柳のかつら　葵のかつら　日影のかつら

ゆふかつら　まさきかつら　まさきのかつら

玉のかつら　もろかつら　蓬や菖蒲の急か

つら　隠に何いつ迄をつらのあさいうらし

夕かけを鬘やかなかつらと云　源氏は

むかしや夕かつらよするらぬや

一櫛

黄楊櫛　はまくし　錦笠櫛　つけくし

小櫛　さしくし　くつまこに櫛や別の

ゆい新妻と云事　常つくしと云　忘れ

此くしに名人あるとの後のと云

一笠

菅さきの笠　勝なと云　石笠　女の笠ミヤこ

唐人しけ笠や　むら笠　かつこ成こ

一鏡

やるかゝミ　七（ナツコ）この鏡　ひをかゝミ張や日形の

かゝミれ鏡　まつ清鏡　ます（丸）かゝミ　香き鏡

両も鏡

一いつの年枯る大和国の山男是にアリと云と

いふつるの天をさそへて本ならすそれ枝を見る之

いえ川あとは石縵ろり　比形のすかや

一弓

たつかゆみ　女のすまかしかや　紀の笠やうち

まゆり　在り梓弓　ねやめの弓　あまの

八弓あり論にこの弓とも云因茲あまねく
ゑわ矢まで弥り白の弓ようときれ矢をとる
あつしの時は弓弦すけとよめり鳥さけ下
弓といふ昔黄帝の天の座り狩しけるを
としけり弓の名を弓束（ユヅカ）弭（ハズ）巻なけと
（七尺寸）弓はけの長とも云七尺五寸なり
弓弦（ツル）弓を袋にするといふ為の世也

一矢

立つ矢といふふつうの矢や流矢とはあやまちにみゆる
不慮の矢也矢とは雉射し矢や華の矢（はなちし矢也）
何ぞの矢とは矢のさきにあとを付く
鳥を射るや数（此二字を矢つかと）矢数矢一つ
弓絃弓いるをも猿り矢馬と云事
矢数とよめり

一老懸といひけり玉鬘とよむや折て、

一刀

ひし刀あると云とも刀の名や竹刀
牛切刀鶏の刀絵の刀とも云（えもちしの時鋭く）
爪刀膝刀国つゝ三ノ刀と云夢に刀と
三大く国をえし事やんごすとこそ
垂仁天皇の御時右の袖中に入て御所
をとらひきしや竹の刀にかぎのとつて刀や

一冠　（かうふり）蝉ノ麻ノ冠とも（上果ノ冠ハ布ニテ）
玉冠ハあミちすとハかうふりのかさりを
云や冠ハけさる徒あり

一枕　菅枕　九本枕　旅枕（旅寝ニ不苦）　揺枕（こゝろ）
人の枕にハあらす　提やまとミや　篠枕
手枕（万葉ニハ）手ニ纏（ミえし）と読り　新枕
さゝ枕　磯枕　石枕（ひるねに）かり枕
（しきたへし）小枕　玉枕　袖枕　浮枕（舟寝ル）
舟旅なとにてもうき枕といへり
草枕　旅行舟と読り　ひち枕

涙床枕　枕草紙と読り　枕言とさ
おもと云　題目の詞なと　枕言や古今（也）
枕詞ハ別のことや　序等詞（こゝろニ入）
（左右）とちをおし枕草紙の上にも昔の男を枕にて大名

一床　ニ鷹狩床　玉床　岩床　あら床
石床　雨床　車の床　工手ま床

一家　あれてる家　雖はいや　いた（石）家　常家
翔家　ある人への家　私の家と云り　隠家（二意）
山家　かり家（旅寝）　てる建家　（離家とも　宇治なとも）

一都　久かたの都　竹の都　王と有り

一 田

（付稲）ほつねまくとは　種ゆるすや　秋の田乃穂の
苅場（かりば）いる庵　稲の種のかし　田も男にも
おしね　おしてはいふ　遅稲（ワセ）や　はふ　白稲の
名も有くてつかし（新穂）のきはゑんいふも
稲の扨んとすらはや　見いや　どりまや
田子はいふとをも（田に）　村苗とをも　早苗の花とい
稲の花や

一 鴈

秋の田乃穂のへく霧不ほとよまれ云霧
のすると　七夕　あまる霧　よろしと　詠り
鴫ひく（名あり）霧の　一霧　あるるし　流る霧あし
詠り木乃葉までの霧たる引
ことを　詠り　夏もいつも　秋静かる句
名より　詠へりと　後はての頃や霧
をよすのすくなくと　後の粉とい　うりと
ゝゝ　不案田やし

一 雲

円雲　あさ雲　天雲　白雲
青雲　不吉や　天乃白雲　あまくれの雲
鳥の有雲　夕あかね雲　いさよふ雲
うかりてといふ雲の名しれ　更行
雲を伏と万葉　詠り　あり（転）雲

国立公文書館
National Archives of Japan